

彷徨 23

都立西高 ワンダ-フォーケル部

彷徨 23

目次

山行總覽 2 ~ 4

山行報告

83年度男子 5 ~ 14

10月山行 15 ~ 28

84年度男子 28 ~ 42

83年度女子 43 ~ 48

84年度女子 49 ~ 54

個人山行 55 ~ 60

名簿 61 ~ 65

1983年度 (S.58) 男子

分類	山 行 名	期日	備考
新歓偵察	奥多摩・川吾山	4/10	
新歓	・	4/17	○
5月	奥秩父・乾徳山～黒金山	5/7～8	
6月	丹 沢・塔ノ岳～蛭ヶ岳	6/4～5	
夏山合宿	南 了・甲斐駒～農鳥岳	7/22～28	
沢登り	丹 沢・勘七沢・源次郎沢	9/17～18	○
個人	南 了・青蘆山～所ノ沢越 (春山偵察)	9/30～10/3	
スキー合宿	黒根スキー場	12/25～30	○
1月	南ハツ岳・編笠山	1/28～29	
2月	蓼科山		
春山合宿	奥秩父・金峰山～国師ヶ岳	3/21～25	

(0印 女子と一緒に)

1984年度 (S.59) 男子

分類	山 行 名	期 日	備 考
新歓偵察	奥多摩・御前山	4/15	○
新歓	・ ・ ・	4/22	○
個人	奥秩父・龍龍～雲取山	5/4～6	
5月	大菩薩嶺～小金沢連嶺	5/12～13	
6月	丹沢・塔岳～丹沢三峰	6/9～10	○
夏山合宿	北了・燕岳～穂岳～烏帽子岳	7/26～8/1	
個人	北了・白馬岳～梅海新道	8/～	
春山偵察	南了・上河内岳～光岳	8/24～28	
個人	八ヶ岳・赤岳～権現岳	8/29～30	
沢登り	巻機山・米子沢・割引沢	9/14～16	
個人	奥多摩・雲取山	10/6～7	
・	奥秩父・両神山	10/13～14	
11月	南了・鳳凰三山	11/2～4	
スキ合宿	高峰スキ場	12/25～30	○
1月	那須・朝日岳・茶臼岳	1/19～20	
春山合宿	南了・上河内岳～光岳	3/26～4/1	

(O印 女子と一緒に)

1983年度 (S. 58) 女子

分類	山 行 名	期 日	備 考
新歡	奥多摩・川苔山	4/17	
5月	丹沢・錫割山～塔ノ岳	5/4～5	
6月	奥多摩・雲取山	6/25～26	
夏山合宿	北ア・燕岳～蝶ヶ岳	7/31～8/4	
沢登り	丹沢・勘七沢, 源次郎沢	9/17～18	○
スキー合宿	黒姫スキー場	12/25～30	○

1984年度 (S. 59) 女子

分類	山 行 名	期 日	備 考
新歡復察	奥多摩・御前山	4/15	○
新歡	“ “	4/22	○
5月	奥多摩・雲取山	5/5～6	
6月	丹沢・塔ノ岳～丹沢三峰	6/9～10	○
夏山合宿	南ア・白峰三山	8/2～6	
9月	奥多摩・大岳山	9/16	
10月	奥多摩・三頭山	10/14	
11月	大菩薩	11/11	
スキー合宿	高峰スキー場	12/25～30	○

(O印 男子と一緒に)

新入生歓迎山行

奥多摩・川苔山

・1983・4・17

・CL相澤 SL特野 顔賀 三木 上野(2年)
鈴木 豊原(1年) 中村 武内 江頭 竹林
(3年) 萩田 吉田 西入 加藤 森川(画) &
森川(佐) & (OB) 奥山 水野 姓 (顧問)

立川745—奥多摩905—川乗橋925—百
尋の池1117—1251 遊憩小屋(山頂往復)1459
—1636 鳩の巣(解散)

今回の新歓は短いアパローチと展望のよさで
覆って川苔山とすることにした。

朝から雨が降りしもり、新入生の数も2人と
歓迎というムードとは程遠かったが、予定ど
おり出発する。楽な山行とはいえず、概ね大人
数の山行なので予想外に時間をついたことに
問題が残った。

山頂からは 本仁田山、石尾根、長沢背鞍な
ど、雨上がりの切り望の劇に展望は良かった。

急な下りを鳩の巣駅に向かう。途中、思わ
ぬムカゲの出現には、新入生だけでなく、我
々OBの古々も驚かされていた。としかく無事
に終わったことができた。帰りの電車では、1年生も
我々の雰囲気打ちつけて、おまじりの収穫
のあった山行であった。

5月山行

奥秩父・乾徳山～黒金山

・1983・5・7～8

・CL相澤 SL特野 顔賀 三木 上野(2年)
鈴木 本間(1年) 中村 武内(3年)
浜田 山田(OB) 渡部 姓(顧問)

7日

面高1250—塩山1556—徳和1646—1930
国師ヶ原(帰)

渡部先生との連絡不足でやや出発が遅れた
が、立川で予定の服装に替えることができた。塩山
からバスに乗り、徳和で降り、幕営予定の銀
晶水まで2Pで着いたが、幕営困難なため、もう
1P空、銀晶水まで行くことにした。調査不足
がさらけ出てしまい、CLとして取付か、限りであ
る。銀晶水に着くころには、ドツアツリ日が暮れ
てしまっている。ところがそこに待ちかまえていた怪しいお
おじさんの指示で、さらに上の国師ヶ原まで行く
ことになった。結局8時ごろ幕営地に着いた。
1年生にとっては、初めてのキャンプの苦菜に加え
夜ふけまでの行動で、相当バテたらしい。7日、
後から追いつくはずのOBが我々を発見できた
かどうかという心配も残った。銀晶水から
我々を案内したおじさんは、小屋の番人だらしく、
くしかり幕営料を取っていた。

8日

起406 - 尾606 - 扇平709 - 乾徳山
905 - 黒金山1220 - 徳和1513 - 1546 徳山(新)

起床から2時間まわちりて出発す。天気は
快晴であった。乾徳山までは鎖場の連続で
1年生にとっても楽しめる道だ。山頂は岩がゴ
ツツと積もって展望が又変わってきた。行く手には
黒金山が原生林に覆われてそびえていて新たな
アツトがわいてくる。

黒金山までの道は全くの原生林の中で奥秩父ら
しい趣きがあった。ようやくOBの山田と浜田が
追いついて来た。前夜はゴブクしたそうで大変
甲のけけい。

黒金山からの展望は又らによく奥秩父の主稜
がずらりと顔をのぞかす。特に園師岳は金山
黒木に覆われて巨鯨のごとくそびえていた。たゞ
念のため、山腹につけられた沼山林道が奥に
霧々しく、深山の魅力を半減している。山を登る者
にとってはやり切れない思いであらう。

クマゲタに覆われた天ノ才を通過し、一気に徳
和川まで降り、あとは深谷に楽な道であった。天
候に恵まれ、印象深い山行となった。

6月山行

東丹沢主脈縦走

・1983・6・4~5

・CL相澤 SL 顕賢 上野 三木 (2年)
鈴木 本間 (1年) 吉田 萩田 (OB)
渡部先生 長井先生 (顧問)

来たるべく夏の長期縦走にもなえ、ポッカは
丹沢を縦断するコースを取ってみて。

4日

面高1236 - 流沢1446 - 大倉1504 - 1915
花立(幕) 就2130

計画では初日 堀山山荘幕営としたが大倉
尾根には幕営地がない。かといって水無川に
張ったのでは翌日の行程にひびくので、とりあ
えず大倉尾根を登ってみて幕営地を決めるこ
とにした。大倉でフォーターキャリアに水もつめて出発
す。大倉尾根は赤土が露出した単調な登り
の連続で相当にメダる。結局 花立で幕営す
ることになった。花立の手前で急病で動けなくな
った人を救出するアツピングがあった。その人たちは、
OBの手当をうけて一晩我々と寝食を共にする
ことになった。

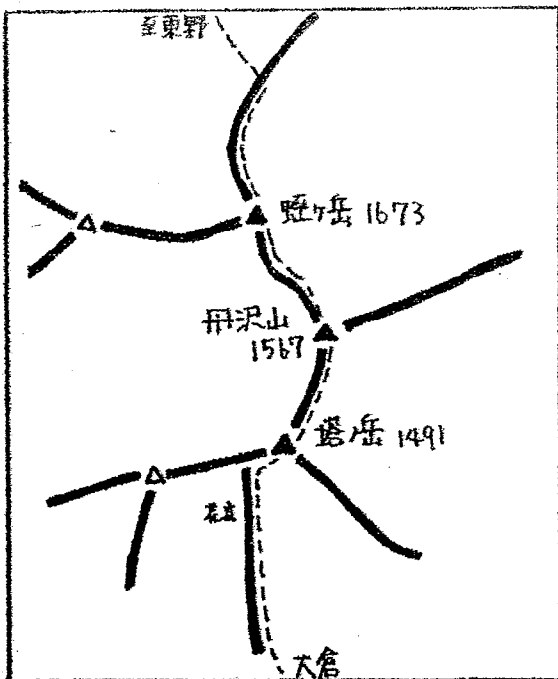
5日

起430-乗615-塔岳650-用沢山

812-蛭ヶ岳1042-原小屋山荘1140-

1412 東野1557-藤野1648-1703高尾(解)

出発して30分程で塔岳に達する。前方にはこれから行く用沢山・蛭ヶ岳が見えていた。天気は快晴。トツアのピッチも快調である。展望のない用沢山を過ぎ、蛭ヶ岳の苦い差りにかかる。カンカン照りの息ヶ岩で昼食をとり、程なく蛭ヶ岳に到着する。予定より3時間も早くついでに、1時間の大体止とした。長距離行なためか、蛭ヶ岳を通過するあたりから1年生にボテが見えはじめ、東野には予定より2時間早くつく。藤野行きバスが来たまでバス停前の床屋の脇でゴロゴロしていた。



夏山合宿

南ア・甲斐駒ヶ岳～農鳥岳

• 1983・7・22～28

- CL相澤 SL辨野 顔賀 上野 (2年)
- 本間 鈴木 (1年) 中村 (3年) 中野A(0B)
- 渡部 荒井 奥山 先生 (顧問)

夏山合宿は北アと相違が決まっているが、ヒネくお者の37期は全員一致で南アを推した。3000m峰を4つも踏むのが難力だったのかもわからない。しかし、0Bの都合がつかず中野が仕事の場合、合宿を途中で参加して、後は0B無し登山行となった。

22日 新宿 2320

23日 辰野443-伊那北550-戸台700-北沢峠835-長衛小屋850(湯)-乗1043-仙木峠1211-駒ヶ岳1507-帰幕1740 就 2014

戸台で、林間学校を抜けてきた渡部先生と合流し、北沢峠行きのバスに乗る。昭和57年の台風10号によって南アルプスの林道は多大な被害を受けていたが、この北沢峠～戸台間はほぼ壊れていて登山者も集中していた。しかし人が入らなくなった鳳凰三山では鶴が戻ったという話である。長衛小屋でテントを張っていると我々にはおなじみの雨が降ってきた。甲斐駒ヶ岳

ツ7断念かと思われたが、OBの所望により決
行する。仙水峠で昼食をとり周辺にせまった腐判
支天の豪快な岩場を横に駒津峠への急登で
ある。駒津峠では甲斐駒が大変美しかった。
甲斐駒の山頂に着いたとたん雨が降りだし、
全く展望がなかった。期待を裏切られ、差し
入木の7ルーヴを食、て早々に引き上げるが駒
津峠まで戻ると雨がやみ、再び甲斐駒を登る
現れしガツガツとした。ここからは北沢峠まで
直線の下りだが、途中双見山から見た北岳は美
女が振り返った様に似ていた。(個人的な意見で
はあつた。)

24日

起400-麓557-仙水小屋(幕) 就1810

朝から雨である。仙水小屋まで樹林帯の単調な
登りである。途中、甲野氏が山を降りられついに
OB無しとなった。小仙水の手前で昼食をとり、どこ
か頂かわからない小仙水を通り、1時間程
で仙水小屋に着く。藪沢カールのド真ん中で、
雪田もあった。とにかく広々としていい所であった。

25日

起200-麓403-仙水岳509-横川岳
1231-両俣小屋1336(幕) 就1915

今日の行程は、長大な島尻尾根下りである。
今合宿最大のヤマ場であろう。ガスに包まれた

夜明け前の仙水岳を早々に下りる。すぐに樹
林帯に入ると今度は倒木の連続である。いつ
とルガ落ちてくるかわからない恐怖におのま
つ、起伏の激しい尾根を野呂川越へ向か
う。野呂川越からはひざが折れやすくなるよう
な急な下りを両俣小屋へ。なんとか幕営地に
着いてようやく一息ついた。

26日

起411-麓612-左俣小屋936-肩の小屋
1520(幕) 就2027

今日の行程は第2のヤマといえる。なにしろ標
高差1200m、野呂川の川底から白峰の稜線
まで一気に登ってしまうからだ。ところが起すた
のは4時。2時間の寝坊である。やはり、2
日連続の2時起きには無理があった。左俣
ノ小屋までは快適な河原考だが、そこからの
急登には入りにマイナ。森林限界をす
ぎたらすぐで、見えている中白峰の頭にはかな
か近づかない。一年生のバテも相当激しい。
稜線に出たら、快晴だったせいか仙水方面
がよく見えた。午後3時ようやく北岳の肩まで
達するが、とて北岳を越える時間と余力がな
いため、計画を変更してその日は肩の小屋に
幕営した。

27日

起400—荻557—北岳715—中白峰900
—間ノ岳1026—農鳥小屋1113(解散)1809

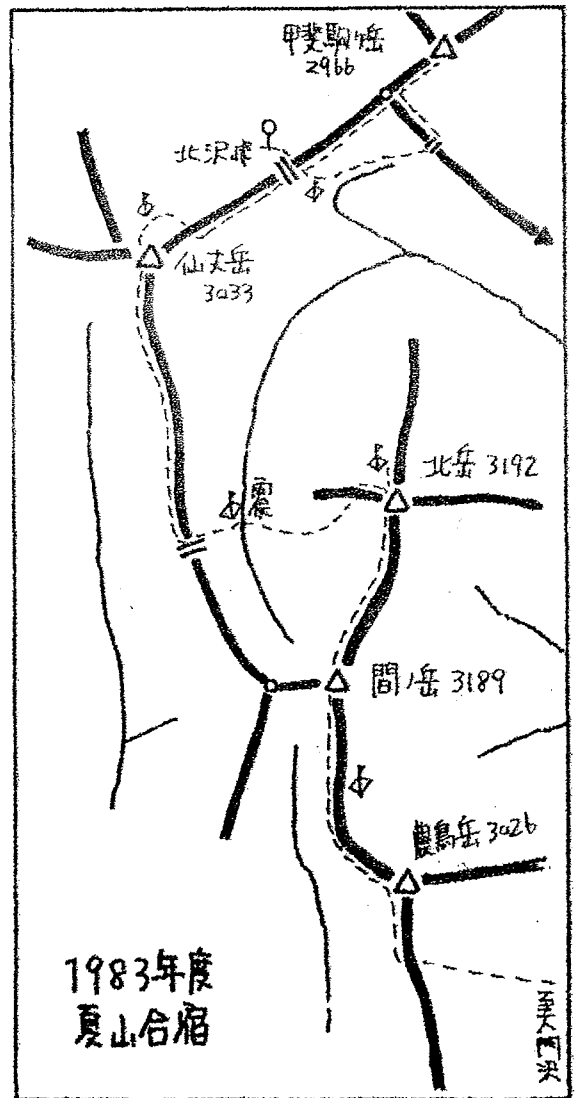
朝からガスであたりは真っ白だった。あこがれの北岳はガスで何も見えなかった。皆、精神的な疲れが見られてきた。日本第4の標高の間ノ岳もガスで何も見えずただ岩がガラガラと落ちてきた所しか見えなかった。結局、前日のツツでその日は農鳥小屋泊まりになった。今山行の小行休になるはずだったが大雪残念である。しかし農鳥小屋ではガスも切れてまわりの景色も見えてくるようになった。

28日

起200—荻40—西農鳥岳503—農鳥岳636—大門沢小屋947—大河原橋1300—奈良田1321(解散)

朝目覚めると、また！表は曇一ツない快晴だ。昨日大門沢小屋まで行かなくてよかった。とにかく今まで山頂で晴れたことがなかったのどとにかく嬉しかった。西農鳥で御来光を拜もうと1年をせがす。感慨もひとしお感じた。最後の3000m峰の農鳥岳では1時間近くレストをとってしまい、たっぷりと最後の展望を楽しんだ。特に塩見岳は台形のすきりした形をしてとても美しかった。北の方に目を向けると、北岳は鋭く、間ノ岳はどろりと好

対象にそびえていた。惜しみつつも山頂を後にして今度は奈良田までの長天な下りである。大門沢小屋の河原でランヤをとり台風の影響で荒れた河原を行き、樹林に入り、八丁坂を下り、吊橋を3回も渡り、やと野呂川林道まで。奈良田で先生達は温泉へ行くと別れていた。やと合宿が終わった。解散式を終えてそういう奥感がわいてくるようになった。



9月沢登り

舟沢・源次郎沢・勘七沢

- 1983・9・17~18
- CL相澤 三木 瀧賢 沖田 (2年)
- 銀木 (1年) 中野&東山氏 (OB) 以上 勘七班
- SL 神野 上野 (2年) 斉藤 本間 松原
- 壺原 (1年) 松本&萩田&浜田氏 (OB)
- 以上 源次郎班

17日

面高1242 - 沢沢1445 - 入倉1503 -
幕営地 1532 夜2100

18日

起400 - 塔530 - 塔岳 (2班合流)
1430 - 帰幕1655 - 1808 大倉 (解散)

楽しい沢登りも雨が降ったので
楽しみも半減していました。今回は大倉のキ
ャン下場の上流でテントを張って勘七沢
と源次郎沢の2班に分かれて行動した。

勘七班のほうは途中で舟沢登山訓練
所の沢登り講習会といっしょになってしま
ったことあって塔岳での合流ではかなり
遅れてしまった。とにかく勘七・源次郎の名
沢とも沢登りの楽しみを理解するにはよ
かったようだ。

スキー合宿

黒姫スキー場

- 1983・12・25~30
- CL相澤 SL神野 上野 瀧賢 三木 (2年)
- 鈴木 本間 斉藤 壺原 松原 (1年)
- 宮崎氏 萩田氏 松本氏 (OB)

26日 77シードスキー場の駐車場に7E.ロング
スパーツをつけ、15分程歩いたひらいた場所を
幕営地に決めた。設営や雪のトラック増づく
りは午前中で終わり、午後はスキー場に出かけた。

27日 男子は合宿前からけがを患っていた銀木
をまいて全員、黒姫山へ雪訓登山である。出発
の際、アビオンと7000の装着に手こずり出発
が遅れた。1Pでスキー場で最も高いリフトの所
まで行った。そのあとはラッセルのローテーションを
しながらLunchになるまで登った。登るにつれて眼
下の野尻湖がくもった空と殺風景な雪景色
の中にくっきりと見え下るのが印象的。2Pは
どて下り。その日の残りはイグルーをついた。

28・29日 1年生と2年生の一部は初心者
で宮崎氏にコーチしてもらった。テントキパーの鈴
木が一番みじめな日でもある。28日の夜、鈴木
と斉藤は雪訓の日に作ったイグルーに泊った。

30日 最後の日は徹夜して帰るだけ。午前
中には黒姫駅に着いてしまった。

1月山行

ハク岳・編笠山

- ・ 1984・1・28～29
- ・ CL 相澤 SL 上野(2年)
- ・ 鈴木 本間 春藤(1年)
- ・ 河合良(OB)

1月山行は予定では「成人の日」の連休に藤科山に行く予定であったが、OBの都合により延期になったので編笠山に変更になった。そのため参加者の少ない山行になってしまった。

28日

面高 1240 - 立川 1400 - 小淵沢 1706 - 観音平入口 1730 - 観音平 1856(峠) 就 2236

小淵沢からはタクシーを使って観音平まで上る予定だったが、道路の凍結のため林道の入口で下りて歩き始める。暗いので林道脇の近道を通らずに林道をそのまま登って、観音平に到着。夜景がきれい。

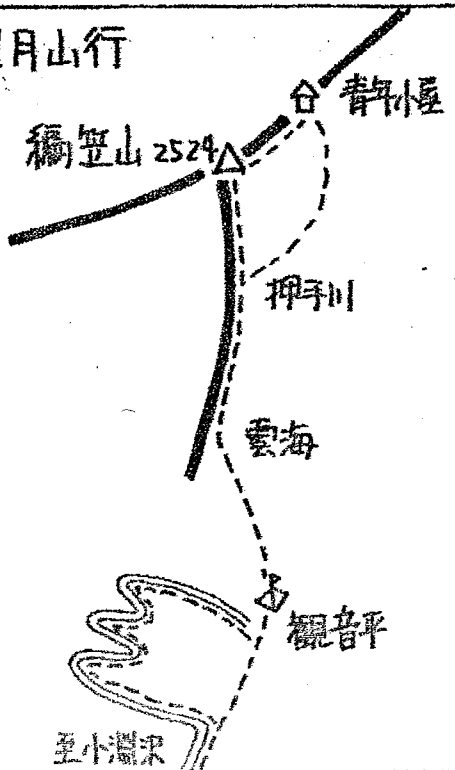
29日

起 430 - 花 615 - 雲海 715 - 編笠山 1032 - 青年小屋 1110 - 帰幕 1254 - 花 1340 - 観音平入口 1433 - 小淵沢 1536(解散)

必要な荷物は1ヶ月前に7月で、編笠山を7

7月7日。谷を歩くと三ツ頭の尾根を望み、ついで下位の雪の中を登って行く。展望台になっている「雲海」で最初のレストをとり、さらに2P位登ると押平川の分岐があり、左の方へ道をとる。分岐をすぎると雪も少し深くなり、斜面もほとんどきつくなっていくが、いよいよのペースで登って行く。が、しばらくしてルートを見失ってしまい、雪の急斜面を直登する。もも位のラッセルで1Pも登った。斜面がゆるくなってきて、すぐ大きなケルンのある山頂に到着した。登りはじめはそうでもなかったのだが、山頂ではガスが出ているというより、まさきり雪の中といった感じで強風が吹き荒れて景色を見るところではなかった。風をよけたため、ちっとした雪のくぼみでランタンをとりながら十分に風をよけられず、その上、持って来たテルモ入2つのうちの片方が開かないので、くさくさ紅茶も飲めないで乗えどうな思をする。ランタンのあとは青年小屋を通過して下山することには、雪面に足元を気をつけて青年小屋まで下るが、ここでも風が強くて皆ちびちびして休む。ここから観音平まで2Pくらいで下って帰幕。撤収。観音平から20分位近道を下り、林道に出て、あとは歩いて小淵沢まで下る。小淵沢に下りるときにはすっかり晴れていて本当に空のような形の編笠山がよく見えた。

1月山行



2月山行

蓼科山

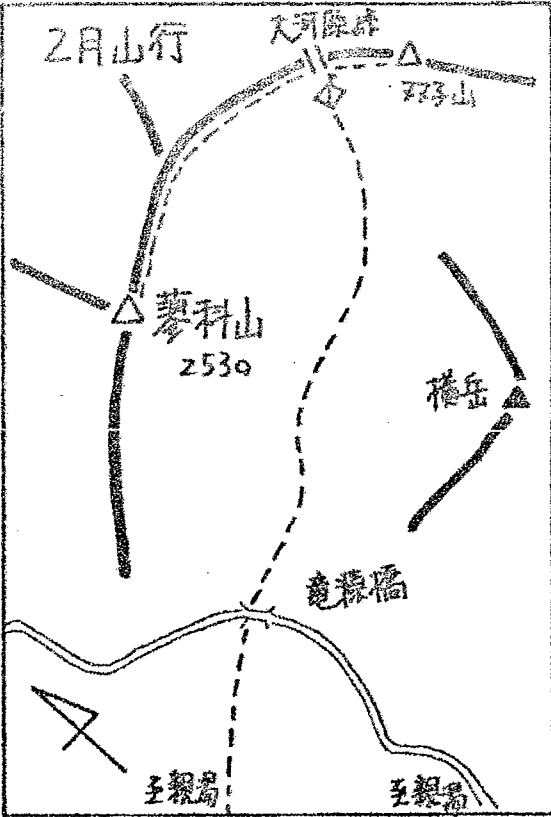
- 1984・2・10~12
- CL相澤 SL 神野 頼賀 (2年)
- 香藤 鈴木 本間 (1年)
- 穴戸A 濃部A (0B)

10日 新宿 2355

11日 茅野 717 - 竜源橋 828 -
 大河原峠 1300 (湯) - 姥 1500 - 双子山 1546
 - 帰幕 1602 - 雪洞 (1620-1735) 就 2020

1月の編笠山に続き、2月は北の蓼科山だ。茅野からは97シに乗り込んで北側の山並を眺めながら竜源橋まで行く。橋のところで予定7カンを7カで済ませ、穴戸Aは1カは7カんで済ませて入った。最初のうちは雪りが続くが天祥寺原峠から緩やかに降りて行く。緩やかなのは良いが、かえって今にも大河原峠に着きそうな錯覚を何度か起こしたのには気づいた。峠に着いてテントを張ったあとは、アビンを装着しての双子山への雪洞登山と二組に分かれた雪洞掘りを行った。

2月山行



12日 起 400 - 姥 640 - 蓼科山荘 912
 - 蓼科山 1032 - 帰幕 (飯) 1132 - 姥 1308
 - 天祥寺原 1405 - 竜源橋 1549 - 親湯 1810 - 茅野 1918 (解散)

峠にテントを張ったまま 麓料アゲックに出発。
 最初から順調なペースで、トップを交替い
 つ登る。が、一息ついたあたりで何だか疲
 になってくる。といっても天気ではなくて雪の
 こと。何かあるたびにスボスボと凍むの
 だ。どうやらスキーのシューズに付られて少
 し積にまわってしまうらしいのだがもう後の積
 りだ。こんなところで後戻りするわけにもいか
 ず尾根に居ろうと試みるがいかんせん二本の
 足で歩行するのも非常に難しい。ある者は
 雪の上を回つて進み、またある者は
 雪まみれになって手足をばたつかせ、中には
 踵まで雪に埋てもがいている者までいた。
 やつとこ尾根に辿りついたときにはもうた
 くだ。それでも何とか気を取りなおして麓料を
 目指した。それから1Pの急登の後に我々はだ
 だ広い山頂に登り着いた。山頂の一角にある
 やぐらのところまで行くと北アなどの展望を楽
 しんだ。下りは差りのときのようなミスもなく帰
 幕し、テントを撤収した後は下山にかかる。電
 源橋まではそう悪くなかったのだが、そこから親
 湯までが予想外につらかった。というのは、
 その歩道(車道ではない)が全然踏まれて
 いなくてラッセル同様だったからだ。そのため
 親湯に着いたのは既に日がとっぷり暮
 れてしまった後で、夕クシーを呼んで雪の
 降る茅野に帰りついた時には既に7時
 をまわっていた。

春山台座

奥秩父・金峰山～国師岳

- ・1984・3・21～25
- ・CL 相澤 SL 上野 額賀(2年)
- 本間 鈴木 有藤 (1年)
- 萩田 R 浜田 R (08)

21-22日

新宿 2355 - 蕨崎 515 - 増富飯泉 625
 - 金山平 844 - 瑞牆山荘 1033 - 富士見平
 1254 - 大日小屋 1520 備前 2036

瑞牆山荘までマイクロバスで入る予定
 であつたが雪が多すぎて不通だったため 増
 富ラジウム飯泉から歩き始める。瑞牆山
 荘から山道となり、今年口雪も多かったせい
 もあってこたえた。1Pめのレストでアイゼンをつ
 ける。富士見平小屋を過ぎると元気のある跡と
 ない者の間にかんがりの間隔があはうにな
 ってしまう。飯森山に登りつめていくと、雪が
 深くて道がよくわからなくなってくる。2年生の話
 では去年は雪がほくの地面を覆う位が
 なくあつた通り過ぎてしまふよく憶えてい
 ないそうだ。飯森山のトラバースは、萩田 R と
 額賀先輩が先に行き、あとから我々がつ
 いていった。

23日

起402—乗652—大石岩809—金峰山
1432—金峰小屋1531(帰) 就2015

朝、鈴木が石油の氷を起こして寝が
遅れた。この日も思ふ通りに行程を覆げな
い。緩線に出てからは、アイゼンを絶対はず
さないよう注意をうける。途中一ヶ所サ
イルを出した。金峰山の頂上にはネズミ?
がいた。こけの煙りつ金峰小屋まで下
り、暮営。

24日

起402—乗720—金峰山801—T1の
列原(ルト2カ)843—朝日岳1100—朝日峠
1203—1337大弛峠(帰) 就2030

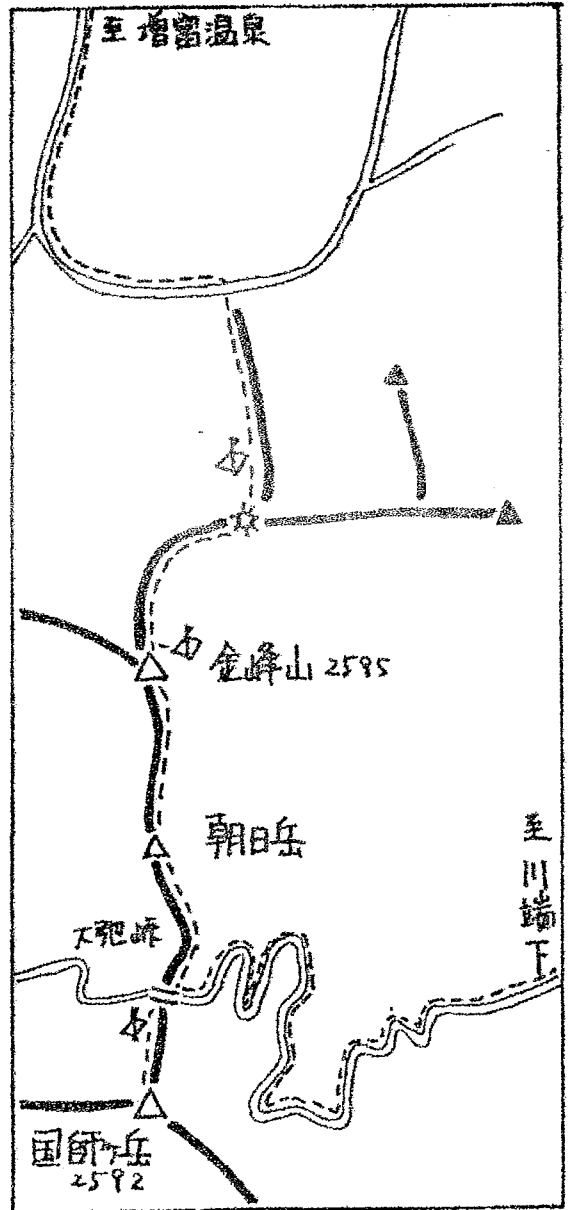
T1の列原でルトがわからなくなる。それ以
外は順調だ。昼頃からちらほら雪が降
りだし、テントを壊った頃から強くおこってきた。

25日

起300—乗610—国師岳800—大弛峠
920—川端下1705—信濃川上1830(解)

今までのペースから見て甲武信ヶ岳を越え
て十文字峠まで行くのは不可能となったので
国師ヶ岳をアタックして川端下を下りる。国
師ヶ岳のアタックは朝一番であり軽装でもあ

るので楽だった。しかし大弛峠からの急な上
りした林道はじつに大変だ。まごの辺りまである
雪のラッセルが何ポイントも続き、キスリングの
中の雪でバリバリになったテントが体温で
溶けてキスリングがまごの背中にフィットし
ている。最後のほうは立っているだけでもつらかった。



10月山行

南アルプス 白峰南嶺

- ・1983.9.30~10.3
- ・CL 相澤 SL 三木 上野 額賀 (2年) 齊藤 鈴木 本間 (1年)

※OBは不参加。

目的: 春山合宿のコース確認。
軽量化登山。

装備: エスパーステント・タンナップテント、ラジオス、アタングスコンロ、コッヘル、ラジオ、ツェルト、ゴミ袋、ロウソク(2)、キジツペ(2)、医薬、修理具、鎌、赤リボン、赤テープ

(30日) 東京 2325 発

(1日) 一静岡 一 畑蔵 1020

登山口 1135 - 池平 1420 - 幕営地

1802 (集) 就 2000

天候: 快晴

10:20 畑蔵を出る。途中登山指導センターで登山者カードを提出。林道は車は入るもののかたりの荒れ方。落石注意の看板を多くみかける。11:20 登山口は林道途中のハンジで止まっていた。1Pとる。池平の道は踏み跡はしっかりしているものの両側から草にふさが

れて、ちよと歩きにくい。と木にはけり急登である。しかし背後からせり上がってくる南ア主脈の展望にも助けられてどんどん高度をかせぐ。深い樹林の中でランチを取る。14:10 迷うことなく池平に到着。ロープースのせりが予定より30分程遅れ。幕営地にニんニんと湧き水がある。全く静かな所である。こゝより今日のヤマ場、青蘆山の登りである。最初から踏み跡は見えない。先が思いやられる。しかし所々に色のおさかげた赤いテープがあり。なんとカールトがあかた。手もなく赤蘆のフチにつく。下をのどくとと木こき奈落の底で。大井川の瀧音すら聞える。赤蘆の頭でレストを取る。赤蘆の後にはいって大きくはないが倒木も現われている。尻尾が広く。笹で一面におおわれている。踏み跡は途断えがたにたりとへたへたに立往生する。途中。全く踏み跡がなくなる。全量横一列にたどり、2搜すように指示する。一人が踏み跡を築

見ずが、赤テープなど目印が見つからず、心配になり、もう一度捜させる。すると、尾根から少し下ったところで木の幹に赤テープが巻かれていた。ホッと一息ついたが、その赤いテープの所に道は全くなく、また踏み跡を捜さなければならなかった。結局、見つけた踏み跡は最初に発見した物と同一のもので、二のように立往体しているうちに予定を著しくオーバーしていた。青蘆山まで2〜3Pで通過するところを既に4P近く下りてはが暮れてきてしまった。こうなるとは青蘆山でビバークするしかないと思、てきた。山頂はすぐそこである。しかし、日は急速に暗くなつていく。最後、レストで18:00になつて、二の時点でビバークを決定。幕営地をさがしとなる。良い具合に尾根の広くなった所を見つけ、そこに張ることに決定した。

[2日] 起5:30 - 発1700 - 青蘆山
 802 - 箱又山1040 - 飯場跡
 1210 - 所、深越[L]1300 - 中、
 宿1651 - 幕営地1840 -
 就2100

5:30は、と気付くと1時間のおぼろげである。夜行の疲れと前日のよびっちでやはり相当疲労していたのだ。寝ざまし時計の必要性を改める思い知らされる。1時間で出ることを目標とするが1年の整理の悪さで30分遅れてしまう。15分で行けと三木が張りきる。ところがどうもくいかず、40分た。たところで笹やぶに道を失い、アサミヤイバラの中を強引に押し進む。ようやく道を見つけたがまた二重線線になった所で見失なう。林の間から見える上河内岳を頼りに現在地を測る。と木が「ようど山頂を指すので」「二本は知らない間に山頂を越したのでは」と思、い始める。また、全員でトレール探しを命じるが、結局山頂の真下にいただけであった。苦学して着いた割に平凡な山頂だった。展望も期待した程なく、二本から行く箱又山すら見えなかった。ただ富士山だけが本当にでかく見ることができた。山頂は広く、また降り口を見失ないかけたがすぐ見つかる。青蘆の下りから倒木が多くなつてきた。と、い、ても比較的古くはやすく越せるものだ。しかし尾根はやせていて、時々右側が崩れてヒヤッとさせられ

る。尾根が広くなり、道を見失ひた
り。知らずの間に山頂を降り越し
たというより尾根をはずしてしま
ったのだ。樹林に囲まれたセコイ
の表現がいつかの山頂だった。11時
になると緊急の交信時間だとい
うのでトランシーバーを出して交信を試み
る。富士山の無線や東名のCB無線
までが入るが、こちらから呼びかけ
てもいっこうに応答する気配がな
い。結局30分以上かけるが全く報
告がなく、がっかりさせられた。トレ
イルを忠実に守って降り始めるがす
ぐにすさまじい倒木にふさがれて全
く道を失ってしまった。尾根の右側
はがれているので左へ左へと迂回
をとりながら倒木は増える一方
でしかも巨大にしていくように思
われる。しかも去年の台風のも
たらしく相当な数であった。いつ
しか伐採あとへ明るく開けたと
ころに出た。右と緩線上のはるか
下の方に小屋があるのがわかった。
たしか小屋は全くないはずなの
だが不思議に思ふが、まあとり
あえず小屋へ所へ降りようと思
う。伐採跡は遠くから見ると明
るく分けていかにも歩をやす
そうに見えるが、木の丈は高
くトゲトゲで腹をまく。てい
た所の三木などは傷だら

けであった。おやお屋まで降り
るおほい人と骨組みだけの作業
小屋のおそらく伐採したときの
端でだろうと思われる。そこで
道を見直す。すぐに倒木が
通れず、手も尾根をはずしてしま
う。今度はけもの道が縦横に走
るところで相当はなれてしま
い、別の支尾根に入り、いくところ
だ。赤布が見つからず、不審に思
い単独でルートを探す。しかし他
の者はどの道がなんとか行け
そうなので、自分のルート探し
にいらた。右を見せ始めた。尾
根の一番右端に踏み跡を見つ
けた時、Tがたか信用しな
か。その道を5分も下るともう
所、深淵だった。予定では昨日
の薄増地である。既に6時間
オーバーなので早急な策を
あきらめる。上野が作、てま
るく岳の看板を道標につくりか
えてここへ木の木にはりつけ
てしま、た所、深淵でランチを
とる。13:00。ここで富士山
に別れを告げ、中、宿への道
をどんと下る。途中、はてな
道の崩壊が数箇所ある。ちよ
と緊張させられる。三木が急
ぎすぎで後ろの方はついてい
くのがおとである。おやお中
宿についたの

が16時であった。二本で日の暮れる前に林道上上るとたかをく。て大休止してしよう。中宿の飯場跡をすぎ吊橋のたもとまで来るとなつ橋がたりののである。二本は全く予想料のことである。とこはワイカーが一本、細いひものような物が二本張ってあるというかたよりなく渡してあるだけだ。下にはゴーンと音をたて流れる大井川があった。たどがた時と二本は川を徒渉しようものならぬ、濡れてしまうだろう。「どうだ。下流へ行、て湖懸橋から林道に上、て来ればいいんだ。」と考へ下流へまっくらに下る中を進む。しかし15分も歩くうちに前に大岩壁が立ちけだり、進めなくなってしまう。地図で見れば100mもなつようなちんけな岩壁である。少しもど、て余糧をよじ登るが、すぐに岩にぶちあたり、ニリヤハシバじじいと思ひ、引を返し、ヒバークするこには決定する。少し戻った木立の中に増水してもかつ橋をたまたます大木たす所で、罪悪感にから木がからテントを張る。食料は差し入れの気分と団アリのチョコレート、マルチライメン、自分が残したオニギリがあった。マルチライメンを釜に焼し、その他のものを煮てお

ける。オニギリは捨てたものだが、オミも捨てずに食べていたので助かった。相変わらず1身、動作は緩慢で茶をわがすのに40分もかかってしまう。よく見ると住居のたすりつけが多いやはり1年生だけ、テントを早くして、たのはよくないことなのかもしれない。明日は例の岩壁を乗り越してしまおうということ意見が一致して21:00に就寝した。

[3日] 起5:00 - 死9:00 - 交信とある
9:10 - 河をわたる10:40 - 湖懸橋13:30

4:00に1人起きるが、たど寝かしてくたど寝かしの声に負けしてしり、また寝てしまう。案に急慢の行論かと思ふ。朝飯のチートを一息ですすり、さ、とく葛城地の背後の斜面を登り始める。50M位置で右に登り気味にトラバースする。2つの谷を横切りまた直上する。150Mは登ったころ突然上方をすべで岩で取り囲まれてしまった。二本はタヤだと思ひ、下降を始める。三本はもう少し系、て登り直そうというかとてもどんな気にはな木はかた。こうおたどいちかばちが徒渉しようと思、ていた、他お上流へ行て渡、てしまうとか、と本でたどめ

なら、三木などは、ワイヤーをラインジ
ーで伝、て渡るとは強行策も出た。時
計は9:00を回、ている。無總郵便でも
ある高藤にダイヤでもとととと交信を
試みさせる。すると順良く、時をたると
と主人斎藤がはかでかい声で「交信
取れました！」と呼んだ。管は狂喜し
かけつける。三木がとて乗、て交信を
始める。とりたえず吊橋のあた、た所まで
行、て欲しいとのこと。再度の交信で別
件の遭難で畑橋橋まで入、ている隊
と偶然交信がとれた。10:20救助
の車が来た。さてどうして渡るものか
と思、ていると、スルスル、といともかん
たんに渡、て来た。一人、一人流れるよ
うに渡、て行く。最後に自分が荷物を
を渡し終、てから渡る。礼を言うはず
もたか命の恩人たけ急ぐからと一
言、言ひ残してさ、さと去、ていった。
助かると思、て中、くりしていきたいと
ころだが、連絡する方が先と、林道
をいへースでとばす。さ、き登ろう
としていた岩壁が林道から見えた。
さ、のありの大きさに一同登らなくてよ
からたと一息つく。畑橋橋で先程、
助かっていた人々と再会する。
状況は既に話しおいたが、車で一
送、ておると親切な一言。三木が乗り
込みダムまで一直線に向、た。残る

た者は上野をふらして畑橋ダムへ
向う。いよいよダムが見えてきた時のつ
めが悪い。一年の鈴木、本間がオー
ターを亂し、我先にと、とと先に
歩いていくのだった。しかも二年の額
賀まで負けじとふらと後かして行、
てしまふ。畑橋ダムに着いてから一
喝。ようやく終、たという実感とし
もに二木からどうなるのかという懸
念が湧んでくる。

C.L 2年 相澤。(記)

反省

C.L 相澤(2年)

今回の山行で最も反省すべきこと
は、実行した日の悪天である。記念
祭が終、てから5日と下をぬらち討
画、準備してしまおうなど土台無理な
話である。確率は10%、2%しかチャン
スはないが記念祭と日数なご
を考えると、元からやらなければ賢
明だったかもしれない。とはいも
の「できる」といううぬぼれがあ、た
から実行したのだから、山をまぐみ
ていると思おれども仕方ない。またコー
スの状態の調査もいかに加減で「た
んたかなるだろう」という考えが頭
を支配していた。二木が山に對する
認識がいかに甘いかが表に出、てし

た。非常に恥かしいことだ。これらのことがすべて裏目に出て、僕にとっては強烈なパンチを食ってしまった。今回の山行はいろいろな面で大きな教訓を与えてくれた。このような山行は2度したくないが、今回の山行で得たものを後半ワンゲル部を引っ張って行く上で役立てたいと思う。

また今回の山行で僕たちが与えた影響が想像以上に大きかったことに驚かしてしまいました。何も関係のない女子の山行まで中止にしてしまい本当に申し訳ないと思ってる。これからOB、顧問の先生との連絡を密にして、また僕たちもクラブに対する取り組み方を改めて、ワンゲル部を春山合宿に向けて立て直して行きたいと思います。

SL 神野 (2年)

今回の山行には僕は家庭の事情により参加できなかった。とくにこの事件を知ったのも1/3の月曜日に木野先生から伝えられた。

僕自身、自分が山行に行かなくなりということもコースについてほとんど知らず、まさかこんなことになると思

ってもいなかっただけで驚かした。

という。この山行によって今のワンゲル部の状態の悪さが表に出てしまったとしてもまちがいでないと思う。そして状態の悪さとはつねに2年部員間の連絡の乏しさ、2つめにとくに木の部員の自覚のなさを思う。

僕自身、SLとしてC.Lの助けをし、安全に山行に行くという義務を果たしていなかった。その1例としてはコースタイムの決定時に際してはほとんどC.L1人の考えにまかす。僕自身としてはただ個人的な希望を言うぐらいで後はすべてC.Lまかせであった。またワンゲル部員として日頃のトレーニングを怠り、時にはさぼることもあった。また山行前夜というのに前日まで準備もせず先程も述べた様にコースについて地図を見てコースの確認というか、ただ道に迷わない程度に調べをするだけという有様であった。そして何と、これも何をした山に行くのか、何のために山に行くのかという根本的な自覚が足りなかったと思う。今までの反省もすべてこれに原因があると思う。

これから後、年間、現役部員としても日頃のトレーニングをしっかりと行い、山の知識の習得、1年生への自

分たちの体験、知識を伝え、後のワンゲル部の活動の充実、発展に力を入れていきたいと思う。

最後に今回の事件に対して学校、OB、父兄の方々におわが申し上げるとともに上記のことをお約束いたします。

瀬賀 (2年)

今回の山行は多くの反省があげられると思う。まず記念祭後、すぐには、たまため食料計画など完全にはできず準備が手薄になったことである。また山行計画が事前に決まり、十分な話し合いがないうままに進んだことである。そしてこれを部長が押し付けせず、独断ですべて決めたことの問題があるが、今後ともあまりしなからた2年生全体にも問題があると思う。

この山行で特に注意したいのは、南アルプス南部という荒れた山域でカモシカ山行という名によりコースタイムを十分に与えず、計画が不十分であったことである。僕としては今回のような結果は反省のあったかたちだと思う。そしてこの機会をもとに改めていきたい。

また今度山に対して甘い態度をとるのを防ぐので、その考え方を改め

たい。また総合的な知識だけでなく、技術の習得を完全なものとしていきたいと思う。そして計画については、事前に話し合、て、じっくりと行い、とれおて、C.Lだけでなく、全体の意見をとり入れていきたい。

三木 (2年)

今回の山行は事前の調査が不足していたということもあるが、部員としての自覚が足りなからたことが大きな原因だと思っています。部長1人に計画をまかせるという今の状態は改めなければならぬでしょう。

これは僕自身にもいえることですが、部員全員へ山に対する考え方が間違っていたと思います。つまり山を甘くみていたということです。

山の知識も不足していると思うし、2年生の指導力も足りません。今回の山行に限ることですが、準備期間が短かからたということも原因として挙げられるでしょう。

こういう色々な問題が有ったから今回のような事が起ったのだと言えるでしょう。このような事へ再発を防ぐためには、部員全員が山に対する認識を改め、もっと知識を

習得し、もと体カをつけるなど、着山
合宿に向けて強化に励げむべき
だと思ひます。

上野 (2年)

ワンゲルの先日の10月山行(個人山
行)のことと今後どのようにしてい
くかを述べたいと思ひます。

先日の10月山行では本当に迷惑を
かけました。もう済んだことですが、
あつたばよからたなどとは申しませ
ん。このことを反省材料にして今後
どのようにしていく方が大切だと思
ひます。

このような準備になつて僕は始めて今
のワンゲル・フォーゲル部の現状を覆け
たような気がします。情け無い事だ
す。

今のワンゲル・フォーゲル部の現状とい
うのは半ば斜陽化しており、たつ月例
山行を“こなす”ための山行となつて
いきました。部長以外は誠意を持って
山に行こうなどとは思ひませんでした。
僕だけが山から帰つてま
た時よりも、学校のトレーニングが終
つた時の方が充実していたという感
じがする程です。重たい荷物を背負
つて休息も十分でなく、半ば蒸籠さ

れたクワアの山行では“山は楽しい”
などと思ひ人はおどろくはないであら
う。ましてや楽しいとは言えない山行
に誠意を持って取りくむなどという
ことは人間として不可能だと思ひま
す。

・誠意を持って部活動にとりくまな
くではいけません。

・誠意を持って着山合宿に臨みます。

鈴木 (1年)

僕が今度の山行を終つてみてま
す感じたことは、僕が「山を甘くみて
いた。」ということ。これは今度
の山行だけでなく今までの山
行にもいえることではないかと思
ひます。

今度の山行は準備期間が短かつ
たということもあり、山行前は5万
分の1の地図を買つただけで地図
でコースを調べたりしなかつたし、コース
タイム等もガイドブックなども読ま
ずに山行計画書のコースタイムをう
のみにしてしまひましたが、それでも
なんとかなるだろうと心の弱さと思
つていました。山行中にはリストの荷
物などに地図を出して見たりしなかつた

し、暗れているからと、して天気回をとりながら、行りました。又、今度の山行は、準備に關していろいろ考えさせられました。特にピンチの危険などです。僕の場合は、器具ピンチの電池が準備でした。今更で、何回も山行に行きました。が、ピンチのように、狭小に、便所も、水の対策も、手入水もおろそかにする。という事にも、山に對する甘さがあると思ひます。

今回の山行は、やはり夏休みの偵察が失敗したところ、原因があると思ひます。そのため、次の候補地を決めるのに、時間がたつて、深塗りや記念祭などが、あるため、準備期間が短くなったのです。しかし、もう少しOBと連絡を良くと、早く計画を立てれば、良かったと思ひます。もう一つ、今度はOBとの連絡が、お利うまい、悪いのじゃ、ないかと思ひます。たとえば、夏山でOBが、途中でいなくなつたのがどうです。顧問の先生たちもOBを信頼しているから、OBとの連絡をしっかりとらなければ、いけないと思ひます。

斎藤 (1年)

今回の山行は、準備期間が少な

準備会も開かず、手前万全な計画を立てることもできなかった。僕も山行の2、3日前になるまで、本当に行くか、わからなかった。とにかくおれたん、食料もその場で、すぐ決めてしまひ、器具の点検などもろくにできなかった。しかし、それらのことだけが、今回の山行の失敗に、直接つながらないと思ひたい。今回のことより、普段の活動での悪い部分が、浮きだしたことです。技術の習得が、あまりできていないので、それが大きな原因と、なつた。反省会も、適當なし。山行の前夜にも、いろいろな問題が、おれたん、感じました。

これから、はまず、技術を身につけて、おれ、地元の読み方、器具の構造や修理の方法など、学ぶことは、たくさんある。手前山行の計画段階においても、それらを、活用するようにして、みんなでお話し合つて、計画を立てるべきだと思ひます。結局、部員全員が、積極的、に部活動に参加することが、大切だと思ひます。

本間 (1年)

今回の山行は、記念祭のすぐ後、おれたので、計画を、充分に、検討できなかった、というの、が、一つの問題、だが、それからは、なせ、記念祭の前に、準備、できなかった

たがということになる。

直前にやるのが悪いといわれたらその一言でつまるが、部としての集団になると問題はとう簡単にはすまない。

まず年間の山行は正しい行ふことが決まっているのだから年の初めに大体決めておくべきである。その際の資料としてガイドブックしかないというのは40年余の伝統のある部としては立派な話である。それからこれから山行記録を何か書いてしまっておくと、今すぐには役に立たなくても、いつか計画を立てる時に、役に立つかもしれない。それに計画段階で1年は口を出さず資格がないと言われたことがあるが、どうなるか自然に他人任せに任せてしまうので、全員での話し合いも部活動の一環として大切だと思う。

考察

今回の事件を引き起こした原因としてOB、顧問との連絡不徹底や計画の不備などが挙げられたが、そのよつた原因として原因や、それから今後の対策について考えてみようと思います。

まず第一に山行の計画から山行までの日数が足りないうこと

すは、これは場所の決定をするのが遅すぎたと思います。春山合宿があるから我々の活動があるわけだから“春山合宿”という言葉に西高ワニゲル部の名譽があると思います。その春山の場所が山行直前まで決まらなかつたことは部員同志、特に2年の話し合いがあまりなかつたことが省点として挙げられます。

次にリーダー自身をはじめとする各部員一人一人がクラブあるいは“山”そのものに対する認識の甘さだと思えます。そのようなことを今回の事件を通じて初めて思い知らされたときは全くもって恥かしいことだと思います。特に今回の山行に関しては山の状態が悪いと最初からわかっていて、何とかなると夕方をくわていました。コースタイムを決める時も、どうにかして、一泊二日という限られた日数で全行程を収めようということが最優先となつてしまつたので春山偵察は時間をかけてやるという原則に反していいのです。それから今日は全行程、天候に恵まれていたことは幸いだったので、もし一度雨にみまわれようとなら、当然、歩くペースは遅くなるので、本當の遭難になつていたらかもしれない。山登りにとはどうして去死とは切り離

せばいものがあると、各部長改めて認識しました。計画の不備すおわち山に対する認識の甘さということが改めて思い知らされました。

OB、顧問との連絡の不徹底は今回の事件に尽いて最もウエートをしめることだ"と思います。特に今回は当然行っておかなくてはならないこと。例えば先生との事前の連絡やOBに計画書を出したとき指しを仰ぐなど全くありませんでした。これは全てC.Lの怠慢に他ならないのです。このことに関してはC.Lの努力したいので一年生はよく肝に銘じて来年はしっかりやしてもらいたいと思います。当然、これからリーダー自身、態度を改めます。

続いて今後の対策について考えてみようと思います。

まず、これから一ヶ月間、反省の意味を込めて山行を自粛します。そしてこの期間で今までのワニゲル部の状態を改めて行こうと思います。その具体的な立て直し策としては、

① 山に対する認識を深める。

例えば山の知識(地図、気象などに関すること)や山の常識(テント、チームワーク)を習得することを通じて山とはいかなるものかなど認識して行くこと

です。なお必要ならばOBの方から教わりたいとも思います。そしてこのことは是非とも文章として残し、後輩たちにもわけてもらいたいと思います。

② 部室、倉庫を整理する。

今まで団体装備の管理は曖昧なところが、これにより最近物は粉失すということが多くあります。また、倉庫をもっと活用する必要もでてきました。これらの細かい案としては、器具類はリストをつくり、山行における器具分けの際にもその所在をはっきりさせる。部室の鍵をはっきりさせ、部員全員、金かぎを持つようにする。→盗難防止。倉庫を整理し、棚をつけるなど機能的にし、砂が入らないように工夫して清拭し、部室にある団体装備を倉庫に置く。→部屋の利用価値が広がる。このようなことは立て直しの関係ないと思われながらも知れませんが今の墜落した状態を直すには是非やらねばならないことなのです。

③ 土曜日を活用する。

土曜日は活動時間が長いので、他の活動日と同じことをやっていたのではもたないと思います。そこで土曜日は独自のカリキュラムを組んでみます。例えば山の知識を深めるための勉強

会をすとか、飯の作り方の研究をする
とかいろいろの幅が生まれ来ます。

以上のようなことは向う一ヶ月に
限らず、新しいワングル部の伝統に
したいと思ひます。そして今年度のし
めくくりの春山合宿は尻切ネトニ状
にならないう。成功させたいと
思ひます。

S58.10.21 CL 相澤 (2年)

付・西高w.v部筑ヶ岳山行
に關する救援活動報告

昭和58年10月

西朋登高会 西高係 中野(29)

10月1~2日の予定で南アルプス筑ヶ岳に
入山した西高w.v部14~17人が予定の2
日に下山しないという事態が発生した。幸い
翌3日昼過ぎに全員無事下山した。

本報告は二本に対してとられた西朋登高会
の救援捜索活動を中心にとりまとめたもので
ある。

1. 山行計画
2. 救援活動

1. 山行計画

山行名: 春山偵察及びカモシカ山行

目的地: 南アルプス白根南麓

期間: 昭和58年9月30日(金)

~10月2日(日)

目的: 春山合宿のコース確認
軽量化登山

参加者: CL 相澤 SL 三木

額賀 上野 (2年)

本間 鈴木 春藤 (1年)

コース: 9/30 東京2325発

10/1 静岡1100 - 畑越1000 -
青森山1500 - 所ノ天越1700

10/2 麓600 - 筑ヶ岳900 -
一徳松尾1100 - 白石1600
= 身延1730

緊急下山路: 1) 引込返す

2) 所ノ天越 ~ 畑越

3) 筑ヶ岳 ~ 大武刀尾根

食糧: 5食×人数分(2日の昼まで)

緊急連絡先: 中村(3年)

最終下山日: 10月2日

2. 救援活動

10月2日

21:00 相澤宅に連絡先の中村に問合せ

22:00 武内(3年)より西朋・青谷(28期)と

w.v部顧問・渡部先生に連絡

22:30 保護者に連絡

2) 状況次第で今夕より第2次隊を派遣し、本格救援活動に入る。

7:00 第2次隊のOB確保の連絡。
8名のOB 18:00に自宅待機を
確認。

7:45 第1次隊 白石到着。

8:00 白石現地本部設置、加藤残留。
救援隊 CL 田宮。

8:30 救援隊 田宮、藤田、吉田 乾
(13:00までに引き返す。ルート
状況の確認)

12:10 西高より問合せ。

12:25 高校生より西高に全員帰降下
山の旨連絡。

12:30 白石隊 加藤、保護者に連絡。
召集OB 断続。

13:00 白石救援隊3名、白石帰着。(そ
の後、残置食料、ガレキ回収)

16:30 中村より情報収集

19:45 相澤と本部との連絡。

20:00 第1次隊 帰京

20:16 高校生 東京駅着 [次回(延期)
虫迎え]

20:30 対策本部 解散

以上。

新入生歓迎山行

・奥多摩 御前山

1984.4.22

CL 本間 SL 青藤、鈴木、松原、塩原(2
年)、中村、中川、仲田(1年) 相澤、神野、
藤賀、上野、三木、沖田(3年) 林A、山田B、加
藤B、西入B。(OB) 渡部先生、木野先生、井田先
生(顧問)

22日 立川744-奥多摩905-奥多摩湖935-御
前山1220-避難小屋1443-産橋1550-奥多
摩駅(解散)1657。

(本題に入る前)新入生の傾向について考えて
見ると、大勢の人が入部するけれども退部して
しまう人も多い。というのと入部するの人数少
数をいふことも比較的長持ちする(といえば表
現がおかしいが)という2つのパターンがあり、
結局は適当な人数と質の方が、量よりは後者の
方に落ち着いていくようだ。

さて、今年の新入生は十分に満たす。肝心の
新入生は3人の前評判が良かった。またお祭り
みははすのカレーライスパーティーもこのカ
レーにベテランの飯では今いち。しかし堅護
にはかえりきれない。とにかく113113な面では
省の落ちた山行となった。

5月山行

大菩薩嶺 ~ 小金沢連嶺

・1984・5・12~13

・CL本間 SL齊藤、鈴木(2年)、
中村、中川、内倉(1年)、齋賀、神野
(3年) 武内(00) 渡部健、奥山昭
(顧問)

[12日] 西高1255-塩山1545-裂石
1612-福ちゃん荘1843 [幕] 就2130

今日は午後発で電車を乗り継いで塩山へ向かう。バスの時間が合わず、塩山からはタクシー利用で裂石まで行った。裂石で準備体操をした後に出発。1年生にとりては最初の本格的な山行だが、皆そう遅れることもなく福ちゃん山荘に到着、幕営した。

[13日] 起300-発530-雷岩619-大菩薩嶺640-大菩薩峠725-小金沢山(山)930-黒岳1145-初鹿野[解散]1524

唐松新道経由で稜線に出て、荷物を置いて山頂へ向かう。天気の方はとはいえ、あいにくのがすが、雨の降るような気配はない。大菩薩嶺の

山頂は展望が無く、アンテナらしき物体をあってお世辭にも良い山頂とは言えない。中屋介山の小説で有名な大菩薩峠あたりまで行くと展望なしといえどもカヤクの原が広がり気持ちがいい。小金沢山あたりから樹林帯を出て来たが、二の辺りでSLがルートを再三再四とりちがえてひんしゆくを買っていたようだ。湯沢峠までいけばあとは初鹿野までずと下りだが、まともな下りは最初の30分ほどで、後の3Pはずと林道歩きという地獄のような下りだった。それでも予定よりかなり早く初鹿野に着いた。感想、今年の1年は強うた。

6月山行

丹沢 塔岳～丹沢三峰

・1984.6.9～10

・CL本間, SL斉藤, 鈴木, 松原, 笠原
(2年)内倉, 中川, 中村(1年)沖野,
上野, 三木(3年)武内, 藤田(OB)
表部姓, 荒井姓, 井田姓(顧問)

(9日) 西高1245-大薬野1450-ヤビツ峠
1540-三塔1710(暮) 就2100

6月山行は“恐怖”のホッカ山行
だ。別名“雨”のホッカともいう。時
には“雨”のかわりに“カンカン照
り”がはいることもあるのだが……

午後発で西高を出て小田急線
を利用して大薬野へ、そしてバスで
ヤビツ峠へ。ヤビツ峠からは麻道
を歩いて富士見茶屋まで行く。ここ
からがいよいよ表尾根の登りだ。
今にも降り出しそうな天気の中を
赤土の急登が続く。一つしかない
ウォーターキャリーを背負っている中村
は流石に身ごとだ。三塔に着
いてテントをたてようとしていると、
とうとう雨が降りだした。

[10日] 起400-発602-行者岳715-
大日小屋800-塔岳900-丹沢山の
1040-中峰1200-馬場1458-本厚木
1703[解散]

相模から雨は降りつづいている。悪
役男子はOBから大きな“石”を賜
ってヤビツに託めて出発。赤土に
滑らない様に気をつけ、又、とこ
どころにつけられた鎖場も慎重
に通過する。いくつかのピークを
越えると、塔岳に到着したが、展
望などあるわけもなく、皆、小屋の
陰でアムアム震えていたのでし
た。丹沢山でも震えながらランチ
を喰らい、OBのお達しもある
あの“石”から開放された。三峰
への下りへとかがめた。三峰は思
ったより楽に越せ、数百米おきに
つけられた道標に励まされて下
る。自動車の音も聞こえるように下
ると馬場はもうすぐだ。馬場に着い
たときには雨も止んでいた。

夏山合宿:

北アルプス: 燕岳 - 檜ヶ岳 - 烏帽子岳

84.7.26 - 8.1

CL 本間 SL 斉藤 鈴木 (2年)

中村・中川・内倉 (1年)

OB 加藤氏 浜田氏 吉田氏

顧問 中村氏 井田氏

今年の夏山合宿は、昨年、一昨年と梅雨明けが遅れて雨中合宿になった事や、一年生が林間学校に行けなくなる、とこの事を考慮して7月26日からにしたのが、事前の顧問の注意により一年は時間に行けなくなりまた梅雨明けも早業逆みというおに予想がまるまり外れてしまった。最終日に内倉が転落するという事故もあったが本人も無事で、また合宿を通して天候に恵まれ良い山行になったようだ。

<26日>

・新倉 2330 茶 夜行急行アルプス57号。

新宿駅に集合。現役はでかいキスリング、見送りの人は重たい差し入水を持って登場。今年は何故かスカが今個と多たが、一年が厭で→割ってほい、割水にスカは管の腹に収ま下。Jで列車は3-ズ>中ではいながら臨時列車なのですいていた。23時30分、定刻に出発した。

<27日>

・有明 600 — 中房温泉 700 — 燕山荘 1320
[備] — [燕岳アツク 1430~1600] 就 1900.

眠たい目をこすりつつ有明駅で下車。7クニで中房温泉の登山口へ向かう。中房からは、北アルプス三大急登の一つ、合戦尾根を登る。天気は晴れもせず雨も降らず、ますますである。合戦尾根は始めからなかなかの急登が続く。途中幾度と一年生が足をつたが、ようやく燕山荘に到着した。小屋から離れた御花畑の中にテントを張って、調子の悪い一年生とOBの加藤氏を残し燕岳を往復する。面白い形の花崗岩と砂の稜線を歩くと、すぐ燕岳についた。雲が出ていて展望はいいが山頂でスカを食や、奇形な岩峰にバジ登ったりして充分楽しんでからテントに戻った。

<28日>

・お 300 - 茶 500 — 一切通し岩 800 - (大天ヶ岳 アツク) - 大天ヶ岳 (L) 900 - 西岳ヒュッテ 1330 [備]

今日の行程は大天ヶ岳を通過して西岳ヒュッテまで合宿を通過して比較的楽なほうである。テントを撤収し、小屋の前まで行く。昨日の雲は既に無く晴れ渡っていて遠く檜ヶ岳から烏帽子岳と裏銀座通りの稜線が一望のまじに見渡せ、我々の行く先の長丁を思いやられる。小屋からは展望の良い尾根を歩く。蛇岩の

下を運んで、大天岳が長く見えるやうに、この昨日奇巖が斜面を転がして雪の巨大物(ビニール袋に包まれて助けていた)を食べた。この花三田高の山頂部を追い抜いてなんぼく切通岩につく。此処で荷を置いて、ランチ片手に大天岳に向かう。中村先生曰く「大天岳の読み方は『おてんしょう』でなく『たいてんしょう』なり。」と云う。大天岳の真諦はさて如何に。山頂で雄大な景色を眺めたつランチを喰らった後、切通し岩まで戻って西岳へ向かう。眠たくなる様な縦道踏の上は、平穏外の裏でツツと溜水を聞。此処では見た穂積のソレソレと薄紅色の夕景のコントラストは素晴らしい。

<29日>

・2000-茶405-水俣乗越615-船生山780 [馬] (橋渡りマック) 船940-穂積1100-大天岳1300-船生山1410 就1800

穂積のソレソレポートを期待していたのが、おてんしょうのガスで穂積が見えぬ。としかく今日は船生山まで来てみる。銀の差も水俣乗越まで下り、そこから東嶺尾根を登り始める。左が存分の銀や山にもあるが、問題となる存分も存分。予備に到着。ランチをすませて穂積へ向かう。存分には一段足で肩からも懐き得る存分。穂積色の頂上、標高3100mに届いた。と云わんと云わぬの雲の間からの展望を望みながら、昔分に誘われて乗換のスイッチを平らげ

そう、乗換もしてから先なので、次の目的地大天(おてんしょう)岳へ向かう。山頂一帯は積もるやうな雪で、人影もまばらで、穂積や橋を眺めつつ、雪高の親子と共に戯れ、おてんしょうの水を食べ、昼寝と決め込んで、心ゆくまでのんびりした。帰りは飛騨乗越から下り、途中から雪原の上をグリセードを歩いて降りた。予備に戻るか否か、2年の積木が軽い日射病で倒れた。1か存分時でも乗換帽子は必需品。暮れかかるとおてんしょうが吉田氏と交代した。

<30日>

起200-茶405-肩455-双穴小屋900-三俣乗越1120-三俣山1150 [馬] 就1800

真暗な中、懐中電燈をつけて居るまで登り、未だ夜の明けきらぬ西嶺尾根を下り始める。としかく今日の行程は長い。干支沢乗越まで30分とばかりな、ペースで走り、ここから登降を繰り返して双穴へ向かう。硫黄の臭う硫黄乗越、そして積沢(おてんしょう)岳を越すと、双穴小屋はすぐそこにある。小屋から三俣へは下の麓道を通らず上の道を行く。豊富な雪原や御花畑に囲まれたこの道は登山者の安かたなく別天地のようであった。途中から気持のよいハイマツの点在する尾根に上り、ピークを一つ越せば、三俣乗越はすぐそこである。やっつけた三俣乗越の

展望はこの合宿中最高のものであり、正面には大きく鷹羽岳が横え、その左には黒部源流をばらんでのツツリとした雲の平がその姿を横たえ、その奥には水晶岳がとさね高い。さらにその左方には遠く薬師岳がその膨大な山容を現し黒部五郎岳のカルデラのように向いている。反対側には目をやれば平前に硫黄尾根、奥には北峰尾根、そしてその先端に杉・穂高、表銀座・大天井も見える。また四方八方山に囲まれている。只この残念であるのは、三俣から双穴小屋へ向かう下側の巻道に登山者による林道かと思う程に掘りかき入れたことだ。素晴らしい展望を膝裏に隠す付くればあとは三俣山荘まで下る。三俣山荘のテニ場も最良、テニの中から橋中・大天井も望める。

<31日>

・起200-茶330—鷹羽岳500—水晶
小屋605(水晶アタック)茶615—水晶
705—小屋1055—野口五郎岳1035—
高帽子小屋 湯 1800

午前2時起床。朝飯をそとに流氷を見上げながら急いで撤収する。3時半に出発。月明りもなく、ラニアモリに整科に登り始める。一時間の峭壁の末、日が出るよりも早く誰もいない頂上に着いた。しばらく待って日の出を待む。山々が朝日によって徐々に照らされ

ていくのを眺めるのは何とも言えない気持ちだ。雲海の上には山の影をした影を映している。つと此処にいたい気がするが先は長い。越え水晶岳へと向かう。快適な朝の冷気の中、ワラ岳を越えて広くなった尾根を行くと赤岳の分岐でここに荷物を置き水晶岳を往復する。頂上の展望はすばるるべく、遠く後立山連峰も見えたが黒部ダムは見えなければ最高の景色であったであろう。赤岳まで戻り野口五郎岳に向けて出発。東沢乗越を過ぎ右下に小さく光る五郎池を見ながら登りにかかる。陽の照りつける中の登りは意外にこたえる。野口五郎岳はつらぬきの山であった。そこから砂礫の稜線を三ツ岳まで行き、雪溪のかき氷を食って生気を取り戻す。高帽子小屋までの下りを走り終えるといよいよ明日は最終日である。

<1日>

・起300-茶420—高帽子岳540—
小屋645—七倉バス停1120—
高温乗1313—(バス)—信濃大町
【解散】

小屋の前に荷物を並べて高帽子岳をアタック。この辺りは少し遅く感じたので今更には趣きが違っている。山頂直下でサブテニ急登になるが、そそを頓挫と山頂。岩場の一角に出た。合宿最後のピークである。最高点は岩峰にあり、そこを一人ずつ登っていった。

小屋まで戻り、荷を背負えば、北アルプス三大急登の一つであるツル尾根。下りが待っている。かなり急坂で傾差も多いがそんな事はお構いなしにガング下る。しかし2キロ、4目を半分を過ぎた頃、内倉が転落してキスリングを失うという事故を起しては、幸いにも彼は無事であったが、キスリングはOBがかり下りて探しているが見つからなかった。そこから濁沢までヒョムカカガらずに下る。濁沢から高瀬ダムまでは平気であったがそこから葛温泉までが長蛇のトンネルを繰り返して、七倉で休んで七七めの七倉トンネルを抜けるとそこは葛温泉であった(終)

落ちたこと 伴内倉昌治

夏山合宿の最終日、私は急登で知られるツル尾根を駆け下っていた。とにがく下る鼻が全てであった。高帽子小屋区後として1ピッチと少し。既に樹林帯に近づき、遠く濁沢のせせらぎが聞こえていた。車も鳴っていた。傾斜のある道はジクザクに高度を落とす。自分はワドに位置していた。セカンドから少し遅れていたため、次に見えるかづ直進したら一気に急こうと考へた。そして角を曲がってダダダッ!と行くとした時だった。突然体が宙に浮き、次の瞬間自分はキスリングと道から外れて斜面を転がっていた。背後で先輩が「内倉!」と叫ぶのが聞こえた。落ちたと思った。

どうやらわからぬが、夢中で動かすキスリングがずりりと肩から落ちていた。体は道を外れて5メートルの所で止まり、キスリングは音を立てて樹林の中に沈んでいた。

ようやく這い上がり、部長やOB・顧問が集まってきた話をすると、OBの吉田氏・加藤氏と共に顧問の中村先生がザックを出してザックの行方を追ってくださった。自分は傷の手当てをもらいつつ、事の重大さがなかなか理解できなかった。9月1日まで下り、後からOBが追いついてきたが、「相当下りて来たがザックは見つからない。下方の泥に落ちたのかも知らない。」という様子を聞きはかした。少しおのまは転がっていたら……。背筋がぞとじた。

結局ザックは見つからずボヤットに歩いたザック以外は何も持たずに東京へ帰った。

明らかに自分の不注意で起った事だ。「おどろかす。ガムはるど」と思わず、「もう着いたも同然だ」と気をゆるめてしまふのがいけない。注意にはおぼろげな所で落ちる準備がない。今ではたまたま運が良かったと痛感している。この事は一生忘れられないだろう。最後にこの転落事故で多くの方々に迷惑をおかけしたことを改めてお詫言申し上げたい。

9月山行：沢登り
巻機山

- ・84・9・14～16
- ・CL 本間 SL 齊藤 鈴木 (2年)
- ・中村・中川・内倉・新倉 (1年)
- ・OB 萩田氏 浜田氏 加藤氏

<14日>

上野集合。偶然にOBの青谷氏と同じ列車に乗り合わせる。氏は故・森下氏の追悼山行に、守門山へ行かれるそうだ。

<15日>

上野 — 六日町 — 清水 —
幕営地 — (米子沢 溯行) —
巻機山 — 帰幕。

六日町からバスで清水へ。西朋の合宿で一層々に来た事があるという浜田・萩田両氏を頼ってテニ場へ向かうが、途中で間違ひ、今来た道を戻る。とにかくテニ場につき、テントを立てたあと米子沢の溯行に出発。

浜田氏がスズメバチに刺されるというアクシデントもあったが、大した怪我でなくて一安心。最初大きく高まいたが、その後は非常に快適な溯行を続ける。丹沢なびと違って零田気が明るいのも良い。上部ゴルジュ帯ではシャワークライムを楽しむ。ゴルジュ

帯を抜ければ、核心部のナメ帯に入る。快適なナメが数百メートルも続く。ニ股に着いた所で登山靴に履き替え、巻機山頂に登ってから下山にかかる。約2時間の道程をノンストップで下ったので、テニ場に帰った時は膝がガクガクになった。

<16日>

幕営地 — (割引沢 溯行) — 帰幕
— 清水 — 六日町駅 [解散]

今日は割引沢へ遊びに出かけたのであるが、おおいに天気が悪く、今にも降り出しそうな感じである。昨日のシャワークライムに続いて水泳を試みる。泳いで釜を渡り滝に取りつき水しぶきをあげて滝を登る。やはり沢登りは濡れたいと楽しくない。が、やがて雨がぼろぼろと降り出し、上部では雪のアロックもあって冷たい風が吹き、ブルブル震えながらの沢登りとなった。

結局アイガの滝を登った辺りで帰幕する事にして、7時間もかからず天幕に駆け戻った。

11月山行： - ホッカ
南アルプス： 鳳凰三山

84. 11.2~4

CL 本間 SL 斎藤 鈴木 (2年)
中村 中川 内倉 新倉 (1年)
DB 武内氏 山田氏

<2日>

・新宿2355 夜行列車。

その男は我々の傍にやて来るとよく解からない話を一方的に喋ったあげく、七ノガへ消えてしまった。ここから山に登るの正と云ったその男はニッカスボンとキアラハンシューズを身につけていて奇物は解つておらず着いたジャンパーを肩にかけていた。下げて解つたらその男は常盤の者と思われた。男が去る3時間後、我々の夜行列車はホームから再び出た。我々はすでにその男の事を忘れていた。

<3日>

○穴山 525 — 御座石 鏡泉 652 — 燕頭山 1050 — 鳳凰小屋 1228 [降]
(地蔵岳往月) 1327~1530 就 1900

穴山駅で列車を捨てる。駅には是がまき木ばかり。駅前には数軒の家が点在するのみで、その背後には山が黒々とそびえている。鏡泉の送迎バスに乗り込み、悪路の中登山口へ向かう。

鏡泉で少し休憩の後歩き出す。1時間歩くと後OBから石を授かりホッカを打つ。燕頭山までの急登をあとにし、背後の海に浮かぶ島のごとく突き出た八ヶ岳が見える。再びの急登は少し突然例の男が登ってきた。格好が格好だけに山に登るのかという疑問があるが、男は整足で登っていた。

やがて燕頭山に着きラン干を食い、2時間半で鳳凰小屋に着く。テントを設営し地蔵岳をアタクする。頂上は風が強くてオベリスクの駐間にうすく眺望を楽しむ。

<4日>

○起300—終500 — 観音系 711— 燕頭山 725 — 南御座小屋 830 — 夜叉神峠 1120 — 八ヶ岳 1145 — 甲府 [解散]

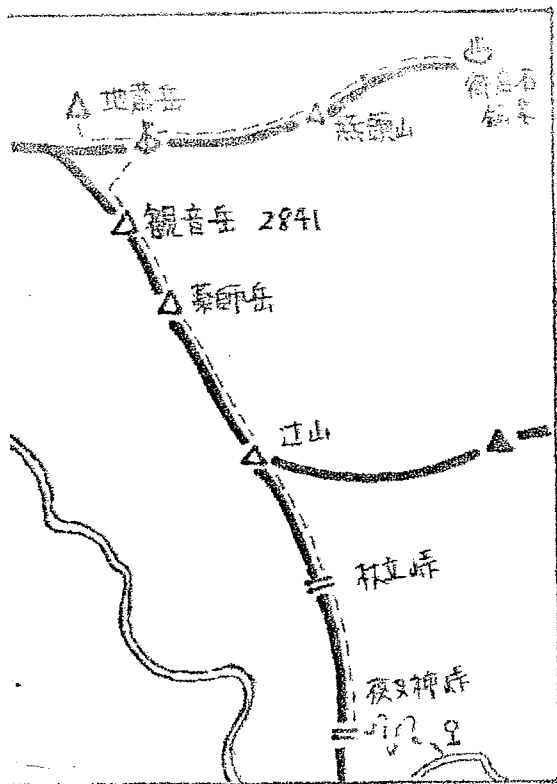
懐電の光の中で息が白く見える。アグをぬくにも土が凍っていてビシビシとやち抜ける。頂上は満天の星が輝き快晴のよう。両男の異名を好集が知るが2日間も晴れるとは。11月3日は晴天特異日(過去のデータからその日は晴れる確率が高い日)であつたのが両男の力はもと強いはずである。

稜線に出て白根三山を石手で見ながら観音岳に登る。途中雷鳥を見、羽はもう冬鳥の装いを見せていた。

観音岳山頂の展望は360°である。白根三山から急流、北には甲斐駒、西には八ヶ岳から

樂師と見え、これが行く藁師も白と
 藁の束にある。藁師まで30分もかからない。
 南御堂小屋は樹林の中を下りた巨神に
 ある。おいしいとわゆる水はさびとでも有り。
 とから1時間、展望の間に巨神でテニ。見此
 例の男が立っている。この晴天は彼の力といふことに
 なり「天照大神」と男は呼ばれることになる。

樹林の中を枯葉を踏みしめて歩いていると
 犬が現れた。この犬と僕に1時間以上も
 歩いていくと夜叉神峠に到着した。とつち
 この小屋の犬らしい。峠は行楽客でにぎやか
 である。下り坂は歩いてバス停にエヒク着いた。
 バスを待っているとき天照大神が無事下山して主
 バスに乗りかかると南アルプスは最高であった。



スキー合宿:

・高峰高原スキー場

・日付 12-25 ~ 12-30

・CL 本間 SL 青藤 鈴木 萩原 (2年)

・内倉・中川・中村・新倉 (1年) 沖田 (3年)

・OB 萩田氏、浜田氏、松平氏

<26日>

朝明けぬ早朝、夕方に巨大40kg ス
 リングを詰め込み小諸駅を出發。やがて
 高峰ロッジに着く。冬装をつけ、直派なホ
 テルを模倣した湯を探しに歩き出す。雪が
 ちらちらと降り、巨神のゲレンデが少し離れた
 林の中にテニを設営する。一息ついてから
 スキーをばいてゲレンデに向かう。

スキーが始めての年はスイ滑り上級生を
 羨ましそうに見ながらゲレンデ下部で練習に励
 んでいた。

<27日>

今日はスキーの猛練習。それにしても一般客
 が少ない。ワカも俄々ワカゲル部員(貸し切り)
 のようであった。

<28日>

男は雪割を行う。適当なゲレンデを見つけ
 そでに行く。一年が冬装装着に手間取る。ワカ
 歩行で息を切り、ピッケルストップ、下ヒザ歩行
 を練習し、これからの冬山に對して心構えを作る。

履にはアノ場に戻り、イグルーを作る。4人
入るしかりた物で、その夜1年はその中
で過した。

<29日>

皆スキーも上手になり、またスキー容も増えて
きた。我々の冬山用のヤツに注がれる
下界人の羨望のまなざしがまじりかかる。

<30日>

最終日である。バリバリに凍った8人用テントの
入ったスリッパは馬鹿にアカイ。バス停のあるロッジ
まで歩き、最後のスキーを乗し去。小銃に着き解
散。皆満足気な顔であった。

今日の合宿は天候に恵まれ、人が少ないが
たせいもあって充分に楽しめた。また積雪期と
面する冬山経路も初めてとはいえず、この方の
冬山に向けて満足かいくものであった。

1月山行

那須：朝日岳・茶臼岳

83.1.19~20

- CL 本間 SL 青藤 鈴木 (2年)
- 内倉 中川、新倉 (1年)
- OB 山田氏 西入氏

<19日>

・西高 - 黒磯 - 大井温泉 - 幕営地

授業が終りて早く出発したが黒石麓到着が
17時30分。夕飯を蒸し、山麓から早速
出発して幕営。かなり凍え込んだが幕営がま
じりであった。弁当を食って早々に就寝。

<20日>

・冠500 - 標695 - 峰の茶屋822 - 朝日
岳920 - 峰の茶屋1000 - 茶臼岳1100
- 峰の茶屋(雪割1122-1235) - 帰幕
1330 - 黒磯 [解散]

5時起床。出発に1時間45分かかる。

ロープウェイ発着所から登山道に入る。ヒストリ
ックに少く行くと突然荒涼とした高山を思わせる
場所に出る。まるでイェットトイのような。雪が
雪をばし石が露出していた。

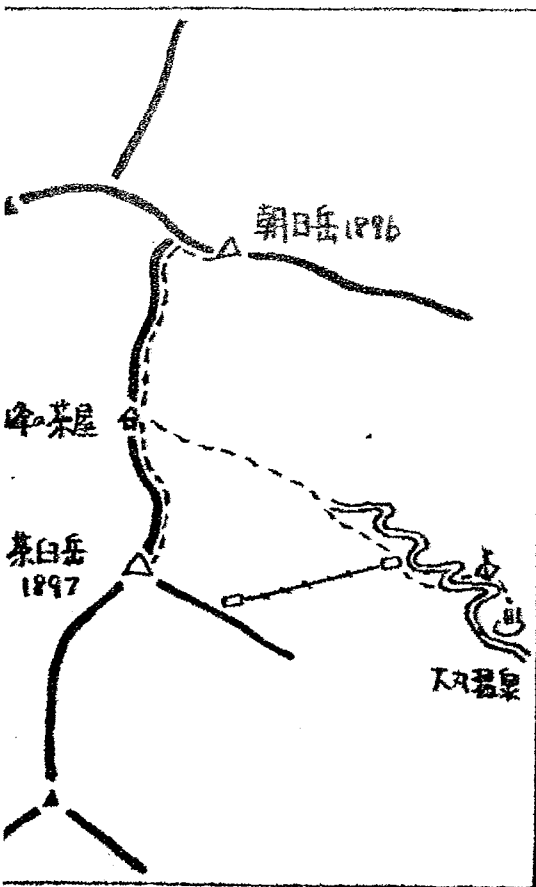
あという間に峰の茶屋に着く。展望が明け
霧の山並みは平線まで続く。

北に登山道をとり稜線上を慎重に登る。
40分で朝日岳。ほるか遠方に安達太郎山が
印象的だ。

下りは途中から山腹をトラバースする。気を引
き締めて歩かなくとす。斜面を滑りそうだ。

峰の茶屋に戻り今度は南へ。硫黄臭い岩場
を一気に登り、茶臼山頂に着く。近くの火口は理
がすかた。

ランチを含めて下りる。峰の茶屋に着く間に雪
が降り出し山の天気は更かり甲斐工には驚かエ
れる。茶屋で雪割をして稜線をはきぬて
ベニヤンアに向かう。(終わり)



2月山行 中止の経過

リーダー：本間之祐

(八ヶ岳を予定していた2月山行は中止になった。
その経過を列挙する)

この山行は参加予定者が、現役が4人のみ
と非常に少なかった。2年の奇藤が膝の故障、
鈴木は足のねんじり、陣の中川が太鼓の筋を
痛め歩行困難になり、OB 1人を含めて総勢
5名となった。

山行当日の土曜日に夜行で八ヶ岳へ向かう予
定であったが、その日朝から強風をとちゆう雨が
中部から関東にかけて降った。中部山岳地帯は
かなりの降雪量を記録していると思はれリーダー
としては心配になりOBと連絡をとった。西入氏と
午後5時過ぎに連絡がとれたが話し合いの結果
山行は中止と決まった。

原因として挙げられる天候の悪化・参加者少数に
ついては日時を可らす方法もある。しかし山岳部
内部の山行に対する意欲の減少という事態が
最大の中止の原因であろう。

この事件のため、この後行われ春山合宿では
登山の知識が足りなくなつておに思われる。
今では2月山行を中止と決定した事について
非常に残念な思いを残すばかりである。

春山合宿:

南アルプス・上河内岳～光岳

85.3.26～4.1

CL 本間 SL 鈴木 (2年)

中川 中村 内倉 新倉 (1年)

OB 吉田氏 加藤氏

合宿前は茅種梅雨による悪天候が心配されたが初日を除いて天気は悪くない。ラッセルも長雨のせいかなほとんど無かった。

<27日>

・静岡516 - 倉谷559 - 畑蘆926 1023
- 大吊橋 1125 - ウソッコ小屋 1400 -
- 1646 横雲沢小屋 [泊] 就 2000

雨の降る中大井川鉄道で井川へ。そこからバスでダムへ。とにかく駅から千時間というアツクは長い。バスに酔った奴もいたようだ。さてダムに着いたのだが非情にも雨が降りきっていて止む気配がまるでない。本来ならば停滞するのではあるが初日からともいわず開放されている横雲沢小屋を目指して出発する。足ならしの林道を歩き終え雨に濡れる大吊橋を渡るといよいよ登山開始である。復察の時に思ってたように蒸気がきつく感じられる。峠を過ぎると調子も良くなる。ウソッコ小屋をすぎるとはじめて階段が続き、そのあと急登が待つ。雪の音の音が数

いであるが、雨が降ってはいまどうしようもない。テロンの罅のホド雨風ではムシで外も中も変わらない。急坂をあえぎ、横雲山から小屋までの氷のついで斜面には冷汗をかかされたがなんとか小屋についた。小屋には先客の明治高橋山岳部のパーティがいる。濡れた衣類を干して明日の天気に期待して就寝。

<28日>

・起400 - 茶臼岳 600 - 茶臼岳 1324 -
1435 仁田池 [幕] 就 2000

昨夜はものすごい風が朝になると風もなく雨も止んで晴らすの天気だ。昨日まで停滞していた明治高のパーティは先に出発した。彼らはどうやら茶臼岳をアタックするらしい。我々も少し遅れて出発。小屋の裏手からすぐジグザグの急登だ。雪もでてくる。登るにつれ深くなるか思ったより深くない。が暑い日差しの下茶臼小屋までは長かった。一度小屋が視界に入り「もうすぐか？」と思ったがこれは甘い見込みである。結局途中でランチをとり次のポイントでようやく茶臼小屋上到着。横線まではもう一息だ。横線に出て、ほった雪を踏んで茶臼岳に登る。山頂からはなかなかの展望で上河内や光岳 遠く聖まで見える。頂上からは仁田池小屋までくたして幕営する。雪は降っていないが暴風で20m以上の風速はありう

<29日>

・起300 - 標604 — 扇老岳 804 —
幕営地 [L] 1040 — 光岳 1300 —
伊礼が岳 1350 - 1453 幕営地 [降]
就 1928

天気は上々今日の行程のメインは何と云っても
光アタックだ。乗るべきラッセルの習得を心に
描きつつも出発する。希望峰までの二重稜線
らしき所は雪に埋まってあとがたもない。希望峰
からは樹林帯の尾根を行く。当然のことながら
茶臼から光トレスらしきものは無い。ワカを装
着し雪を踏みしめる。そのうち扇老岳に到着。
そこから聖や茶臼が望めるがこれも積雪
のおかげ。春山ならでは。扇老岳からは夏
屋らやアまで苦勞するが雪のおかげ。我々は
その上を快調に行く。三百坪の平前に着いた所
でキスリングをテポにて光岳をアタック。尾根上を
アイゼンをはいて斜面を登る。セシ原から光岳
まで時間がかかるが山頂からは上河内方面まで
縦走していく道が見える。2年の鈴木が作る
アートをアイスハマーで打ちつける。ここに寄る
方は是非とも眺めていたおきたい。都立西高の
カレ部の文字が光っている。テポ地まで戻ると
そこは幕営。

<30日>

・起300 - 標615 — 扇老岳 725 —

希望峰 950 - 仁田池 1015 - 希望峰 1045
茶臼岳 1202 — 茶臼小屋 1221 [降]
[雪割 1330 - 1530] 就 1803

朝起きて外に出てみると天幕の上に雪が積も
っている。昨晚雪が降っていたらしい。消えかけ
トレスを辿って扇老岳へ来る。扇老からは雪化
粧した聖岳が見える。更に希望峰へ登り返
す途中が山の切れ目から突然のように両翼
をひろげた上河内岳が姿を現した。
希望峰に荷を置いて仁田岳を往復。風の
強い山頂を後にして一路女へ進路を。
茶臼小屋の裏手にテポを張る。2階建ての
小屋はちの見えるに1階が埋まっている。白銀の
世界は素晴らしい。

<31日>

・起300 - 標543 — 上河内岳 717 —
茶臼小屋 851 — 横産峠 1030 —
1223 ウツコ小屋 [降]

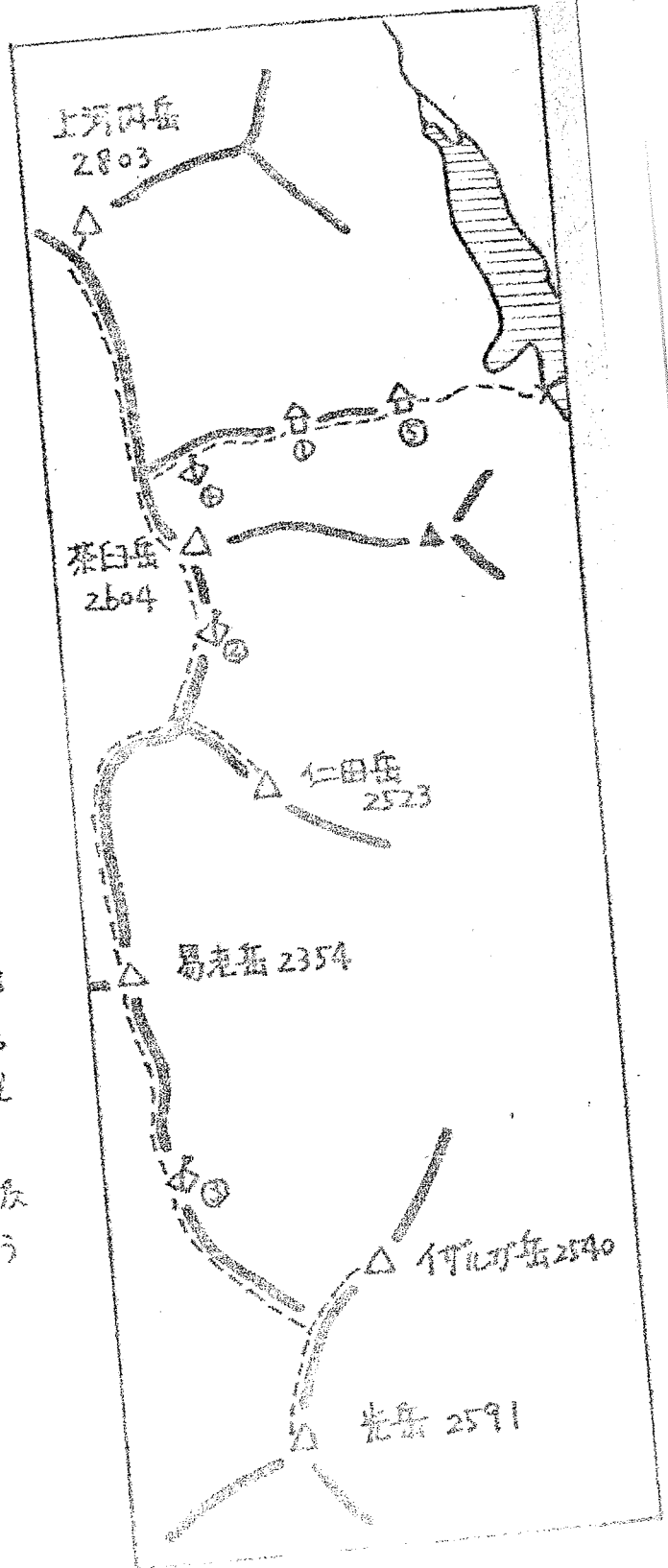
今日はいよいよ上河内岳アタック。天幕を
畳んで出発。稜線に出ると目手帽の上の方風
が吹きつける。目手帽といえば完全業に身を包
んで我々の姿はさながら忍者の様だ。夏道の
お花畑を行くが尾根通しに上河内を目指す。
左手には遠く恵那山。中央アリアス。木曾御岳
が見える。E.L.Y. ロートであった。
圓く締まった雪に喰い込むアイゼンの感触が

心地よい。肩に一気に登り切ると植木が景色が眼前に広がるが木を我慢して頂上を目指す。登りつめた頂上は寒くて蒸気を出していらぬような状況だが360°に見えるものない。標高2803mの頂上からの展望は絶景である。何度も振り返りながら小屋まで戻ると彼は荷をまとめると下山する。横室沢小屋まで下ると雪も消えウツク沢小屋までは石の多い坂を快適に下る。小屋のわきにテントを張ると後は合宿最後の夜を過ごす。夕刻になると花輪のとき雪が舞ったがこんもりかき出し雪は始めてであった。

<1日>

・田代 - 茶臼 - 下平橋800 - 湯沢温泉500 - 1359 湯沢 [解散]

今日は山の最終日。下がそんな事を見ても間もないくらいあつた。湯沢温泉と着いては湯沢のせいせいかダムから仁田岳や上河内岳の白く流る線を見ても実感が湧いてくる。湯沢から静岡行きのバスの中からは湯沢の横断に南アルプスの山々を見下ろし始めると終わるという実感が湧いてきた。(終わり)



丹沢 鍋割山～塔ノ岳
(5月女子山行)

- ・ 1983年 5月4日～5日
- ・ CL 竹林 SL 江頭
笠原(1年) 松原(1年)

5月4日

- ・ 西高出発 14:10 - 大倉着
16:00 - キャンプ場着 16:07

天気は良。現役部員4人だけの個人山行の様な月例山行でした。

1年生は10kgちよとの荷物で行かせてもらったので、今思えば 随分 楽な山行だったのしょうが、その時は荷物が重い、靴がぬれたでまた...と大騒ぎでした。

初日は予定通りに幕営地に着きました。(…と言っても予定通り電車とバスが動いてくれた というだけの話であら…)

食事の用意にかけようとして調味料を忘れたのに気付く。大あわて。幕営地がキャンプ場だったので、近くのテントに借りたりしてなんとか夕食にありつけました。夜はお菓子をつまんで歌を歌って…と 楽しく 過しました。

(女子ならでは...6+?)

5月5日

- ・ 起 4:00 - 発 7:00 - 11:20
鍋頂上 12:43 - 14:22 塔頂
上 15:11 - 18:06 大倉

要領の悪い2人の1年生と、イライラせず 1つ1つ教えてくれる2人の3年生。和気藹藹と朝の仕度にかかっていたら、“発”までに3時間もかかってしまいました。

お天気は気持ちのいい晴れ。5月の緑はキラキラして、たまに吹く風も爽やかで……でも山行はそんなに甘くはなかったのです。

二股を過ぎ、まっすぐに生えた杉の林の中の道を辿ってくわくわくと登っていくうちに1年生の足にでました靴がぬれた……。

“先輩、足 痛いよ〜”の声に優しい先輩は15分もリストをとってバレーウエッジを貼ってくれたのです。

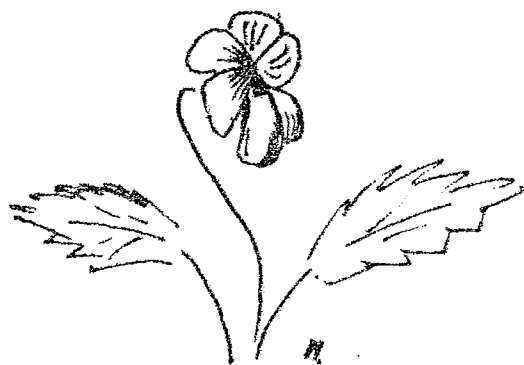
死にそうな顔して歩いていたのに、グレキンのもので、鍋割の頂上に着いてランヤをおませると景色がいい。気持ちがいい、と

ニッコリ顔に戻るんですよ。。

塔に向かう道は“もう着くか”と思わせる道が幾度もあって…おれ達う人もいい加減なもので、“もうおぐてあま?”なんて平気で言って通り過ぎる。

“もうおぐか?”と思って歩くのになかなか着かない。それだけに着いた時の喜びは大きかったんですよ。塔の頂上に着くと、3年生は“初めての山行、よく頑張ったね”と言ってジュースをプレゼントしてくれました。あの味は忘れられない?

予定とはる時間も遅れたの下山でしたが、こんなに“山歩を楽しむ”山行は後はないんですよ。そういう意味で、良い山行だったと思います。



奥多摩雲取山(6月女子山行)

- ・ 1983年6月25日～26日
- ・ CL 相澤 GL 辨野
沖田(2年) 笠原 松原(1年)
水野先生 OB 中野氏(29期)

女子山行であったが、入部したばかりの3人ではパーティーを組むのもままならず、男子にCL、GLを頼んでの山行となった。今思えば行つて帰つて二つしたのほしかりしたバックアップがあったからであろう。当時は失敗もまして失敗と感じていなかったのだが、やはり無知のなせるわざであった。

6月25日

- ・ 西高 12:48 - 13:41 立川 13:51 - 15:00 奥多摩 15:05 - 15:49 鴨沢 16:00 - 18:23 堂所(幕営) 就 21:30

初端、吉祥寺で奥多摩方面の切符を買うのを忘れるという奇妙な失敗をした。これから山へ行くんだという気負いから興奮し、当り前のことを忘れていたとでも説

明でまようが。一同もれどれに
呆れたから電車に乗る。

奥多摩駅から鴨沢までバスで
入り、体操をして出発。

途中、林道の分岐で道を間違
えたが、気づいてひき返す。初
めての山行で多少緊張していた
せいか、体位なにやら勝手に浮
く様である。こういうのはフツと気
の抜けた時が怖い。幕営地に
着くと、案の定どろと疲れた。夜、中野氏が到着する。

6月26日

・ 起 4:30 — 発 6:22 — 7:04
セツ石小屋 7:22 — 9:36 雲取
山 10:03 — 11:13 セツ石山 [L]
12:00 — 13:53 鷹ノ巣山 14:16
— 16:40 東日原 (解散)

朝食の準備時、1年の2人に
怪我が舞いおきる。「危険は行
止の中にあつた。」

今日の天気は雨は降っていない
のだが、ガスがかかっていて展望は
全くない。何も見えない雲取山
というのは、ほまり言つてつまらない。
ピークを踏んだことに努めて満足
し、来た道をひき返す。セツ石

から鷹ノ巣までほ長いだらだら
道を軽快にとぼす。やはり展
望はない。鷹ノ巣の頂上で寒
さに震えながらフルーツ缶に
舌鼓をうた後、恐怖の北斜面
の下りだ始まった。土や木を
吸い、急な道はツルツル。歩
ま方に向題があつたのたろうが、
ガクガクの膝に半泣きになりな
がら滑ってコケてとうとう強引に
リストをひきだしてしまつた。

今回の山行では器具のたれ物
が目立った。体験山行のような
形となつたが、分らないことは積
極的に指導を仰ぐように山行
前から気を配りたい。

北アリス 燕岳～蝶ヶ岳
(女子夏山合宿)

- ・1983年7月31日～8月4日
- ・CL 竹林 SL 江頭
- 沖田(2年) 笠原 松原(1年)
- OB 吉田氏(34期)

7月31日

- ・新宿 23:45

8月1日

- ・5:43 有明 5:41 — 6:45 中房温泉 8:15 — 15:07 燕山荘(幕営) 就 19:45

中房温泉までのバスで気分を悪くしたりのアシデントがあり、出発は8:15。絶え間なく降る重土のある雨の中を急登する。1回目のレストでは2年の私をダウンしてしまっただ。情けないことだ。その後なんとか元気を出し、地道にノルマを消化していく。雨の中、ただひたすら足を運び動作をくりかえしていくと、頭の中は当然カラッポにならざるをえず、ただ1つの思いだけが壁にぶつかってははかばかする。「レストはまだかしら？」しかしまだ試練

は続く。やど着いた燕山荘の傾いた天場で見たものは折れたエスパースのポールであった。男子から受け取って、点検しなかったのだから仕方ない。吉田氏が応急修理を施して下り、たしとが張って寝る。

8月2日

- ・起 3:00 — 発 5:04 — 5:20 燕岳 5:40 — 6:00 天場 7:10 — 10:36 大天荘 10:48 — 10:58 大天井岳 11:41 — 11:55 大天荘 12:06 — 14:31 常念小屋(幕営) 就 19:05

燕山荘の天場から雲海と御来光を見たあの感動は一生忘れない。——と大真面目に言うほど感動また感動の絶景にしばし見とれたあと、燕岳アタックに出発。ゴツゴツの岩にまたしくぶりさき朝日に青春を実感していると、吉田氏が山の名前をたくましく教えてくれた。天場にたどり再度出発。日が高くなってくると、つれ、どんどん暑くなってくる。トップのペースも鈍りかちだ。

大天井はラレキをもってアタック。
槍がすこ近くに見える。大天井
から常念小屋までかなりこなした。
。天陽は非標にも肌を焼
きつけ、行けども行けども道は果
てしなく続くかのようである。天場
に着くころには、頭に心臓の鼓
動がガレガン響きわたっていた。
木場へおりにみたが、かなり遠い
ので、翌朝は小屋と木を買ってこ
にやる。

8月3日

起3:00 — 発5:06 — 7:05

常念岳 7:25 — 12:14 蝶ヶ岳

12:40 — 13:19 蝶ヶ岳 ヒュッテ

朝、日が出ると、目の前に常念
岳が山肌を輝かせながらくま
りとその雄大な姿をあらわした。
今日はこの山に登るんだと思うと
昨日の疲れもあがり忘れて心が
躍る。水を補給したのち頂上
を目指すが、北200mのあたりに登り
てイッでは着けなかった。ピーク
からは常念小屋が小さく見え
いい気分だ。これから行く道は
先までかなり見渡せる。一筋の
道、なんていう形容がぴったりの

白い跡を見やるとなぜか青春ド
ラマのように勇気がわいて来る。
どんな単純な心境も暑さによ
うち勝つためにうまく利用せねば
ならぬ。蝶ヶ岳の頂上では雲
が低くたれこの。展望は良しと
はいえないが、暑くなくて助かる。
天場まではほんの一息。今日は
時間的に余裕があり、テントを
張ってから皆でおしゃべりを楽し
んだ。丈し入れのプリンも簡単に
作って美味々々。

8月4日

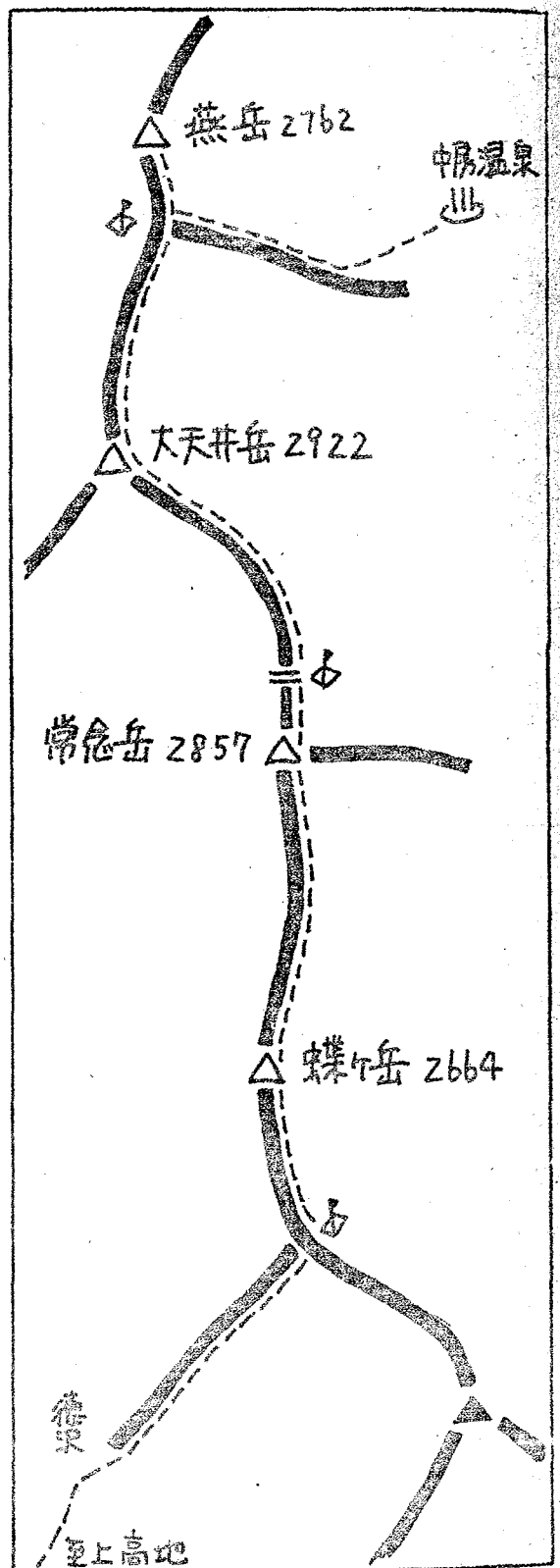
起3:00 — 発4:40 — 8:23

徳沢[L] 9:03 — 10:52 上

高地 (解散)

今日は起床から寝までこの時
間を削ることになった。皆、おし
バックにも慣れてきたのは、も
う下山日である。道々、別れたを
惜しむおりに離れのふいふに思
わぬ足をとめてしまふ。しかも、
下界を目標が足取りは軽くガ
レガレおちつめた結果、上高地
には予定より(時間)早く
到着する。今回の合宿で予定

通りや予定より早く到着という
のは実はこれが初めてなのであ
った。解散後、思い思いに木
陰や日なたで休息し、吉田氏と
合流することになっている西側の合
宿隊を待つがなかなか来ない。
タイムアップで吉田氏と別れ、バス
停へ向かうと途中でばったり遭
遇。こういう山の近くで先輩達
と会えるというのは、とてもうれ
しいものである。この4日間、3年
生、OBにはほんとうに世話に
なり、あらためて先輩という存在
の大きさをかみしめた。私も早く
それなりに一人前にならなくては、



84年度5月女子山行

奥多摩 雲取山

- ・1984.5.5 ~ 6
- ・参加者 CL 笠原
SL 松原 (2年)
- 仲田 (1年) . 江頭嬢 (36歳)
- 柳沢嬢 (35歳) . 顧問.....
- ...荒井先生 . 水野先生

・5月5日

- 立川 7:45 - 8:57 奥多摩 9:10
- 9:55 鴨沢 10:11 - 12:58 堂所 (L)
- 13:41 - 15:58 奥多摩小屋 (葛)

・5月6日

- 起 3:53 - アタック発 5:18 - 6:05
- 雲取山 6:36 - 7:05 奥多摩小屋 (撤)
- 8:13 - 8:58 ツツ石山 9:22 - 11:00
- 避難小屋 11:10 - 11:30 鷹ノ巣山 (L)
- 12:25 - 12:36 避難小屋 12:53 -
- 15:25 峰谷 (解散)

なんとこのお天に女子部員を1人連れて雲取山へ行、た。昨年も同じコースで雲取を登、たが、救、れたことと、天候が悪くて何も見えなかったことくらいは覚えていない。今日の山行は途中で33歳の松本さんと会、たり、鷹ノ巣の頂上と同期の男子と会、たり...で、な、お、な、か、楽、し、か、っ、た。精神的にはかなり緊張して、いた、が、心のどこかで余裕があり、"これが2年の立場なのかな"と思、た。

奥多摩小屋からは富士山や大菩薩が見え、て、こ、も、嬉、し、か、っ、た。昨年は下を向いて登、て、いた、が、やはり山に登、る時は周りの景色、花、木...と見る方が、い、い、い。朝の雲取山アタックは気持ちがよく、頂上ではつろいで写真撮、て、おしゃべりしてOG差入れのお菓子を食、べ、て、女子山行も楽し、た。その後も気持ちがよく鷹ノ巣へと向、か、つ、た。鷹ノ巣の頂上ではココナツを食、べ、て、い、る、と、同、期、の、男、子、が、登、つ、た。と、こ、ろ、み、ん、な、を、記、念、撮、影、し、て、は、避難小屋までは初の2山を駆け下、り、た。(男子がリュックを背負、て、走、る、こ、と、が、で、き、る、と、い、う、の、は、と、こ、も、不思議、で、す。)峰谷までは花を見ながら、楽、し、く、下、り、最、後、の、最、後、ま、で、楽、し、い、山、行、だ、た。

と、ど、う、し、た、わ、け、か、た、た、1、人、の、女、子、新、入、部、員、さ、ん、は、友、省、会、の、時、"退、部、し、ま、す"と、い、う、紙、を、置、い、て、ワ、ン、ゲ、ル、が、去、つ、て、行、つ、て、し、ま、た、の、で、した。。。。。。

84年度女子夏山合宿

南ア. 白峰三山

・1984. 8. 2 ~ 7
・CL 笠原 SL 松原 (2年)
萩田氏 (34歳), 柳沢嬢 (35歳)
武内氏 (36歳), 顧問 荒井先生

・8月2日 ~ 3日
新宿 23:55 - 3:00 甲府 3:08 -
4:23 広河原 5:26 - 10:43
白根御池小屋 (幕)

・8月4日
起 2:00 - 発 4:33 - 9:15 肩, 小屋
9:25 - 10:30 北岳 (L) 11:05 -
12:28 北岳山荘 (幕)

・8月5日
起 4:00 - 発 6:33 - 7:20 中白根
7:35 - 9:20 間ノ岳 10:00 - 11:17
農鳥小屋 (幕)

・8月6日
起 2:00 - 発 4:25 - 5:04 西農鳥岳
5:14 - 5:50 農鳥岳 5:55 - 8:52
大門沢小屋 9:35 - 13:40 才一発電
所 13:42 - 13:47 奈良田 (解散)

8月2日 23:55 新宿発。

たった2人の女子の山行だというのに現役・OB混せて、沢山見送りに来てくれました。差し入れの山を気にしつつ... や、ばり来てくれることが嬉しかった。

8月3日

夜が白々と明け始め北頂 広河原着。朝食をすませ、いよいよ出発。川谷いは石がゴロゴロしててとても歩きにくい。やっと山道に入ったと思ったら木の根がこんがらがって沢山出っばってる。登りは急むち上げる足は重くて... 荷物は重くて。夜行で寝不足だったのが。この日、3回目のリストではみんな知らず知らずのうちに眠っちゃって30分。とても気持ちよかった。そんなこんななのわりには定刻にテニ場着。目の前に次の日登る北岳が..... あらゆる圧迫感がありました。

8月4日

夜雷雨があり心配でしたが、朝外を見とホッとしました。

テントを片付ける頃には、Eヤの中、北岳へ向かう道も人が登っていくのが見えました。ちらちら動く人間が小さく見えれば見える程、山の大きさを感じました。

“あーまたこれをもちあげるのか…”と抱い
つづ、ザックをしまい上げ、1歩1歩歩き
始める。単調に続く急登をゆくり、
殆んど何も考えず進みました。

せつかくはい上がった北岳の頂上は
すっきりがさってしまって何も見えないうさ。
悲しくなりました。テントに入るころには雨
も降ってきこえて…

氣分的にもどろと癒れた日でした。

8月5日

お天気は最高でした。間岳への登
りは(やはりしんどかったけど、でも)
少し楽だ。たよりに思う。単調に登って
おり、おりては登る…しるうちに着いた
…という感じ。頂上はよく晴れ、景色も
最高。ね、ころが、て見上げた空は青く
て大きくて…。つらかったのも何もかも、
パーッと流れて行きました。そのせいか、
どうかは知らないけれど、予定よりも2.5p
も早くテント場に着。テントを済ませて、夕飯ま
では間がある…とのんびり山もながめて
ついつい時間を忘れ、OBにおこられてしま
いました。1人は大急ぎで水汲みに行、たの
びすが、またその水場の悪いこと！もう1人
は天気圖をとって…大忙がし。

この間にOBの間を次の日の予定変更
を決めていました。

大門沢小屋の泊の予定も一気に

奈良田まで下る ということでした。

私達は多少の不安がありました。それに
“楽しい山行をしようよ”ということで、
水の沢山ある大門沢で最後のお宿は
“おきりめん”も作りくりと楽しいお計画
(?)もあるのをきいて聞かされた時、元
氣に「よい！」とは言えませんでした。け
れど、重たい荷物からあと1日解放さ
れるとなると、これもありがたくて……
はつきり返事のときぬまま、そのように事は
進んでいきました。

缶詰をどんどん開けて、ラジオもボロボ
ロにいて、荷物を少しづつ減らすと頑張
りました。

8月6日

一気に下るためにOB、OGが手分けし
て荷物を持ってきて、私達はだいぶ楽
になりました。朝日の昇るのを少し後ろ
に見ながら西農鳥岳へ上がりました。
石がゴロゴロして、どこが道なのか
んなのか…。所々のペンキ印をつたいなが
ら農鳥へ。

ここを過ぎると下りばかりが続く。おり
て行くにつれ、草木も増え、花も増えてい
きました。

大門沢で少し振りに顔を洗って、顔を
磨いてサッパリして(… 落ちない?)
残りのガラガラ道を下りました。

川原を歩いて、山道を歩いて、つり橋を渡
って同じような感じの繰り返し。

つり橋は大きくてやたらゆれるこわかった。

少しの変化もない川原を歩いてると、
ポコッとダムのようなものが..あれ?と
思っているうちに車の通れる道に出ました。

今回の合宿は現役2人にOB、OG顧問
計4人。予定では例年より1日長く、
荷物がかなり hard でした。

加えて南アの黒々しい山を越えるのは、
大変でした。

雷島の親子を見れたこと、テニ場に着
いてからゆくりできたことなど、良いことも
いっぱいありました。



84年度9月女子山行

奥多摩・大岳山

・1984.9.16

・箕原(2年), 江頭(36歳)

・萩窪 5:53 - 6:20 立川 6:38 - 7:25

御嶽 8:12 - 8:20 滝本 8:40 - 8:47

山頂駅 8:47 - 11:13 大岳山荘(L) 12:16 -

12:32 大岳山 13:02 - 15:06 山頂駅

16:10 - 16:16 滝本 16:25 - 16:31 御嶽

(解散)

今回は目的のない山行だった。“山に行
きたいから行く” “山が好きだから山に
登る” そんな山行をすることにした。もとも
と2人共 そんな気持ちで山に登る理由だ
たのだと思う。苦しくて、苦しくて下しか見な
い山に登っており続ける。そんな山行も必要
だけど2人が望む山とは違うような気がし
た。

朝からずっと雨だった。ケ-パルで御嶽山頂。
そして奥の院、大岳山と向かった。奥の院への道
はひどくもの集へ...。大岳山荘でうさぎと
遊び、山頂では別のパーサーに coffee を
買ってもらい、その後写真も撮りながら、霧のか
かった林を見て、東山魁夷だけの幽玄だの言い
ながら帰路についた。なんと面白くない山行
だった。

84年度10月女子山行

奥多摩 三頭山

・1984.10.14

・笠原,松原 (2年)

7:40立川 7:51-7:25 武蔵五日市

8:31-9:32 教馬 9:45-12:35 (L)

13:02-14:30 教馬 15:15-16:20

武蔵五日市 (解散)

登山口からしばらくしかりした道が続いてはいたがだんだんその道もなくなってきた。何處も川を渡渉し道も探するのに苦労したが一応道はあり、新しい空き缶やリゼーの袋が落ちていたので進んだ。11時になっても尾根に出る様引もなく、道もはっきりしているわけではないので2人で話し12時までに目安がつかぬからお弁当も食べて引き返すことにし地図を見ながら進んだ。12時頃パーッとひらけた所にまで山頂がずと上の方に見えた。しかしそこから踏み跡がなく、12時を過ぎていたので、今から山頂に着いても遅くなるし、道はないし、引き返すならこれ以上遅くならない方がいいし……というこでひらけた所を花に囲まれてお弁当も食べて引き返した。

84年度11月女子山行

大菩薩

・1984.11.11

・CL 笠原 SL 松原 (2年)

沖田 (3年) 顧問 渡部先生

・高尾 6:15-7:26 塩山 7:32-7:45

裂石 8:06-10:10 福ちゃん荘 10:30-11:05

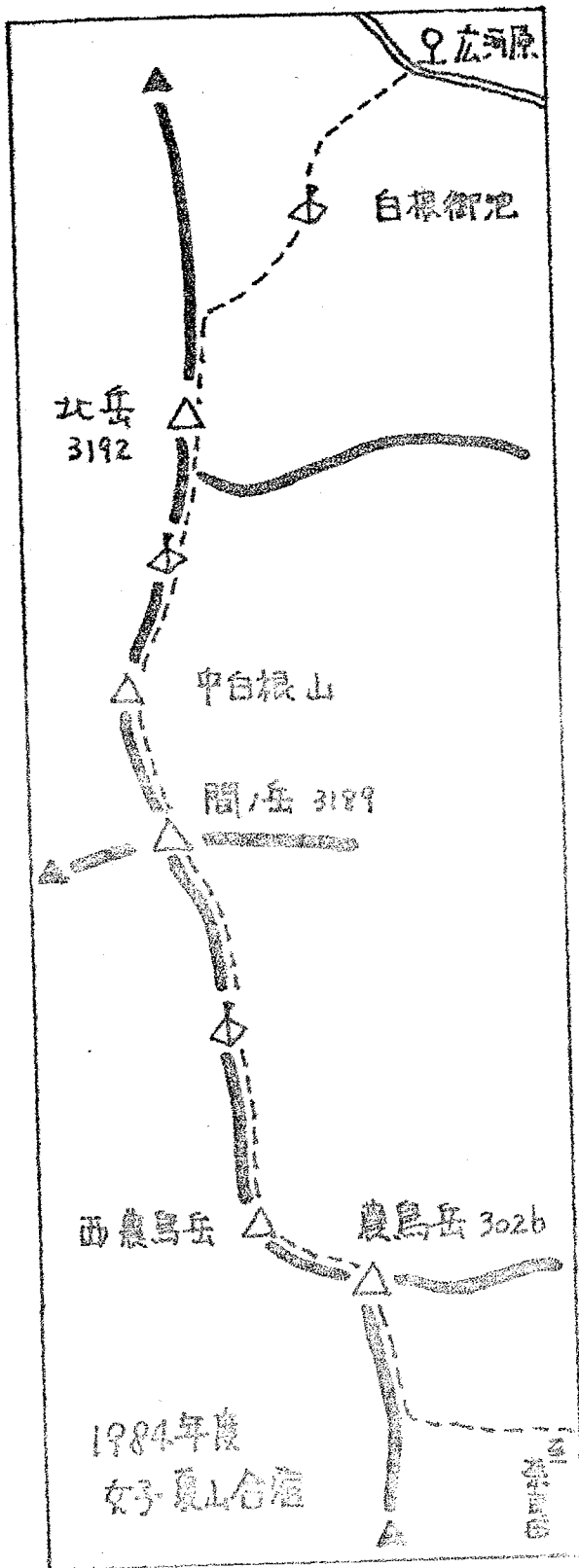
大菩薩峠 (L) 12:00-12:55 大菩薩嶺

13:00-13:53 丸川峠 14:08-15:41

裂石 16:30-16:57 塩山 (解散)

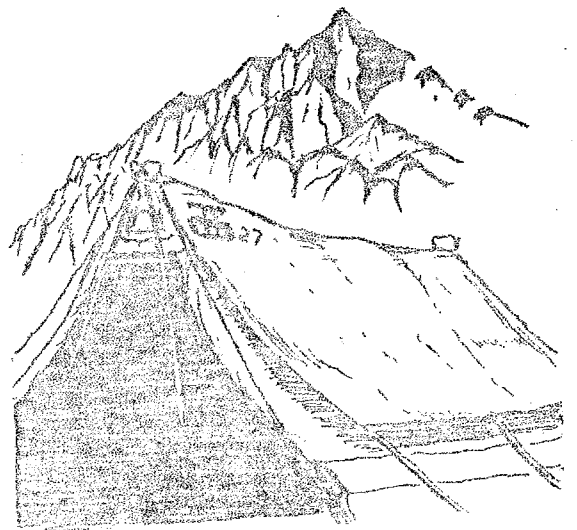
夜行日帰りのコースをただの日帰りで行って来てしましたが、下山の時間はかなり遅くなった。

今にも降り出しそうな曇り空を見上げながら、降り始めたら即帰るよと心に誓い、電車に乗る。塩山から裂石まではタクシーで入る。裂石で雨が落ちてきたのだが、今にも止みそうなのでそのまま入山。結局、まともには降られずに済んだ。今回の山行は季節感を味わいながらのんびりしたもので、前から一度こういう山行をしみたかった。人も多くなく、静かで道もいいし、この上天気さえ良ければ言うことなし。心も落ち着けて山を感ずるなんていうのもたまにはいいがどうかな。



テント 今昔

どこの山に登ってみればわかることだが、今ドーム型テントが大流行りで、いわゆる家型テントは週末へ行っても見つけるのが困難なくらいだ。さて面高の7分程度まで、最近までは家型テント（俗にいう草天）だったのが、今は草天とドーム天を併用している。夏草の最中ヒてもいおうか。ドーム天を使うようになったのは「内倉のガックナク事件（84夏山）」で草天が1つ無くなったことや、ドーム天はくらべて草天の価格が高くなる。自分の予算では買えないという理由があげられる。残る草天1つも老朽化が進み、極度の昂貴根状態で寿命が刻々と近づいている。いずれにせよ数年うちに草天は忘れさられてしまう運命にあるように思える。



北ア・白馬岳～梅ヶ嶽新道
(個人山行)

- ・ 1984年 8月11日～15日
- ・ CL 本間 SL 斎藤 鈴木

8月11日

- ・ 新宿 - 白馬

新宿発が昼過ぎの鈍行に乗って出発。登山者の混雑を避けるという目的と(青春18キップで)運賃を往復4千円をまとうという魂胆のもと、松本で1回乗り換えたが9時間もかかって白馬まで行く。駅前のレストランで買い物などして時間をつぶしているうちに12時になってしまった。

8月12日

- ・ 白馬 - 猿倉 - 白馬尻 - 葱平 - 白馬小屋 [幕]

予定では馬で仮眠ということになっていたが、いろいろ検討した結果、予定を変更して夜のうちに大雪渓を登ろうということになった。早速タクシーをつかまえて猿倉へ行く。猿倉から

白馬尻の小屋までは林道を歩き、小屋を過ぎてすぐに大雪渓に出た。雲ひとつない空には満月が浮かんでいる。月明りと雪明りはかなり明るくて地図も読める位だ。当然の如く、懐電のお世話にならずに大雪渓を登ることになった。恐る恐る雪渓に上がり、ゆっくりと登行を開始する。すぐに雪渓にも慣れ、いつものペースになって一步一步しっかりと登って行く。たいてい上に行ったあたりから、東の空が徐々に白んできた。休むところもなく2時間近く歩まうめである。かなり雪渓の幅が狭くなったところを左岸に上り、2時間分の大休止をとる。休んでいる間にもとんとん夜は明けを行き、まもなく日の出になった。一息ついて、今度は朝日を背に受け、岸につけられた道を登り出る。がたがたした所もあったりしたが、しばらくして流水を渡ると葱平の岩屋の所に出た。どうやら今登って来たのは寡雪期のルートだったようだ。葱平からは高山植物に囲まれた道を行く。途中、何人かの下山者に会うが、「速いよなあ。」

と声をかけたり、狐にフマされたような表情をしたりする人がいた。こちらからみれば可笑しくてしょうがなかったのだが…。さて、自馬の小屋が見えるあたりからパーティーは分裂し、各々のペースで女子勝ち勝手に登って行った。自分はいえ、途中の大岩で1時間近くも朝寝をしてから上に行ったのだが、結局、みんな同じ頃に小屋に付いた。小屋の裏のサイト場の一番いい所にツエルトを張って、その日は旭岳まで遊びに行ったり、小屋へ行って残暑見舞いを書いたりして過した。

8月13日

・起 - 発 - 自馬岳 - 三国境
- 鉢ヶ岳 - 雪倉岳 - 朝日小屋 [幕]

自馬山荘の間を抜けて自馬岳へ登る。山頂の展望は良く、見える山々は多岐にわたるが、人間も多かった。三国境からは個人個人に別れて朝日の小屋へ向かう。鉢ヶ岳へ寄り道をし、雪倉岳を越えて、赤男山をまけばあと一息である。朝日岳頂上へ

の分岐を分けて左の朝日水平道へ入る。ただのまき道だと思っていたのだが、この水平道、なかなかの曲者で、こりこりとしぼられてしまった。それでも朝日小屋に着いたのは昼過ぎだった。明日に備えてゆくりと休養をとる。

8月14日

・起 - 発 - 朝日岳 - 長梅山
- 黒岩平 - 土むねに山 - 犬ヶ岳
- 水場 [幕]

今日は長丁場なので、はやめに行動を開始する。朝日岳で御来光を見て、なだらかな斜面を駆け下れば、すぐ梅海新道への分岐に着いた。岩に大きくかかれた矢印と文字が、我々の緊張を高めさせてくれる。深呼吸をしいよいよ本山行のメインである梅海新道に入る。鬱蒼としたシラビソの林を抜けると、すぐ豊富な残雪と明るい霧田気の照葉の池に出る。荒涼とした感じの長梅山からは顕著な台形の犬ヶ岳がほのかに彼方に見える。さらに林の中を下って行くと、パッと開けたアカマ平の上部に

出た。斜面になっている草原には数えきれぬほどの花が咲き乱れている。また、斜面からはこの先、湿原とシラビソの林が交互に続いているのが手に取るように見える。なだらかなスロープを池塘や高山植物の群落を乗りこなすやうに下っていく。ぬかるんでまた道に足を滑らすまいようにおけると黒岩平だ。黒岩平は高山植物のほか、雪溶け、その水を集めた清冽な小川があって、梅海新道中で一番気持ちの良い所だろう。しかし、黒岩山からは今までと違って急な上下が続く。やっとなでかきで犬ヶ岳に到着したときはもうくたくただった。しかし、今日はもうひと踏ん張りして、水場まで下ることにした。そこでブナの巨木が原生林をなしている黄蓮乗越まで下って見たものの、ツエルトを張る場所などなく、しょうがないのでツエルトを吊って何とかすることにした。

8月15日

・起一巻一白鳥山一尻高山

一人道山一日本海(親不知)

ブナ林の中を白鳥山を目指して元張るが、状況はいよいよ悪化するばかりだ。菊石山を越したあたりからひどい雨になる。足元はしっかりしているけれど、胸から頭くらいまでの雨が、白鳥山まで続く。鬼のようなヤブを抜けて白鳥山に着くと、ガックを置いて木を汲みに行くが、木場はもとより木場への切り開きも見つからない。木場を探にうろたえているうちに30分以上たっつまう。いぼになって朝に木を汲まなかったのを後悔しても後の祭りである。残り少ない水で喉をうるおし、木場をあきらめてむさと下ることになる。山頂からまっい下りを足まかせにガンガン下るとじめじめしたシキ割にづく。ここにも木場があるはず、と思って探し、何とかかなりきついな小まな流れを見つけて皆ふるこぶが、あまりの流れの貧弱さの故、どうせでカッパに木をとっていいのかわからない。それでも何とかしりくからカッパに木をためることに成功し、ここでもう一杯を食べる。

蠅や蛇が多くて、特に金色に光る奴に刺されると、4747痛くてしょうがない。汁割りからも急な下りが続くが、疲れていて走る気力もない。おまけに今まで雲に隠れていた太陽まで顔を出して暑いのは、坂田峠からはなぜか良く踏まれた道を歩く。尾高山では木々の間から日本海を望み終わりの近いことを知る。入道山を越えたと日本海はもうそこだ。最後の気力を振り絞って400mを駆け下り、日本海に注ぎ込む風波川の流水で4日間の汚れと疲れを洗い流した。

雲取山～石尾根
(10月個人山行)

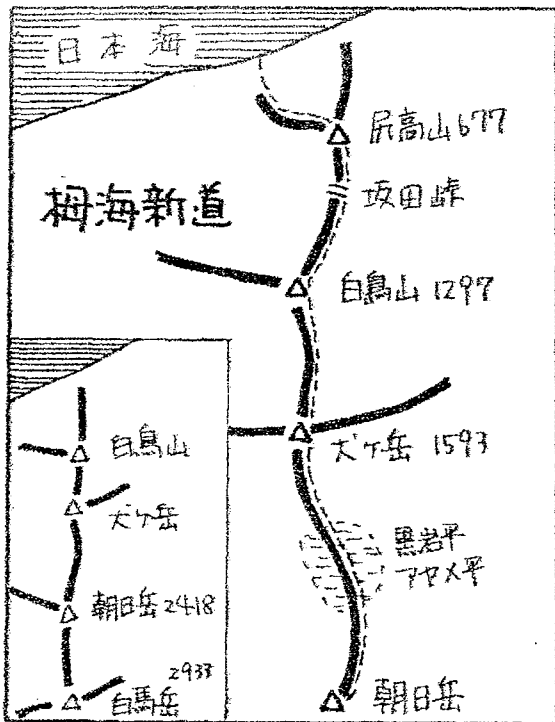
- ・1984年10月6日～7日
- ・CL 中村 SL 中川
内倉 新倉

初めての一年だけの個人山である。目的地は雲取山から石尾根の縦走。楽しい山行になることを誰もが予想していた……。

10月6日(土) くもり

- ・14:28 奥多摩 14:40 - 15:16 鴨沢 15:28 - 2.5p - 18:10
- モツ石小屋 [幕] 就 23:50

バスはもう見えなくなった。目の前を数台のバイクが通り過ぎる。鴨沢のバス停で降りたのは我々4人だけであった。時刻はもう4:30pmに近い。太陽は既に西に傾きかけている。急がなければならぬ。秋は日が落ちるのが早いのだ。我々は木っぼに木を入れ、早々に歩きはじめた。歩き始めてから約2時間、既に太陽は輝きを失い、尾根の向こうに峰を隠していた。歩き始めてから 何もなく、土地の老人



に出会った以外には、人の姿は見
かけなかったし、これからも見かけ
ないだろうと思う。思ったより時
間がかかっている。セツ石小屋ま
で 2時間ちょっとでつけると思っ
ていたが、現在地を推測し、地
図と照らし合わせるとあと30分は
かかりそうである。世界は闇に包
まれ、我々は懐電を装着し、小
屋を目指して歩き始めた。20分
程歩いた時前方にぼんやりと
灯が見え、向もなく我々はセ
ツ石小屋にたどりついた。

セツ石小屋には幕営地はな
かったのだが、もう時間も遅かった
のでテントを張り立ててもらった。
夕食をとった後、雑談に花を咲
かせ、オプティマスにロウをたらして
遊んだりしていたが 11:50 pmに
明日の天気を気にしながらスリー
プバッグにもぐりこんだ。

10月7日(日) 雨の晴

・ 起 5:40 - 発 7:17 - 雲取
山アタック - 8:35 山頂避難小
屋 9:25 - 10:45 セツ石小屋
12:20 [L] - 14:10 鷹ノ巣山 14:20
- 3P - 17:30 奥多摩駅

4:00 am, アームの音に目を
覚ますが、外はガスばかり、お
まけに雨が。これでは御来光を
拝めそうにもないので再び寝る。
6:00 am 近くに再び起きた我
々は朝食をのませ、レインウェアを
着て白い不透明な世界を金の
しおきを浴びながら雲取山山頂
へと向った。

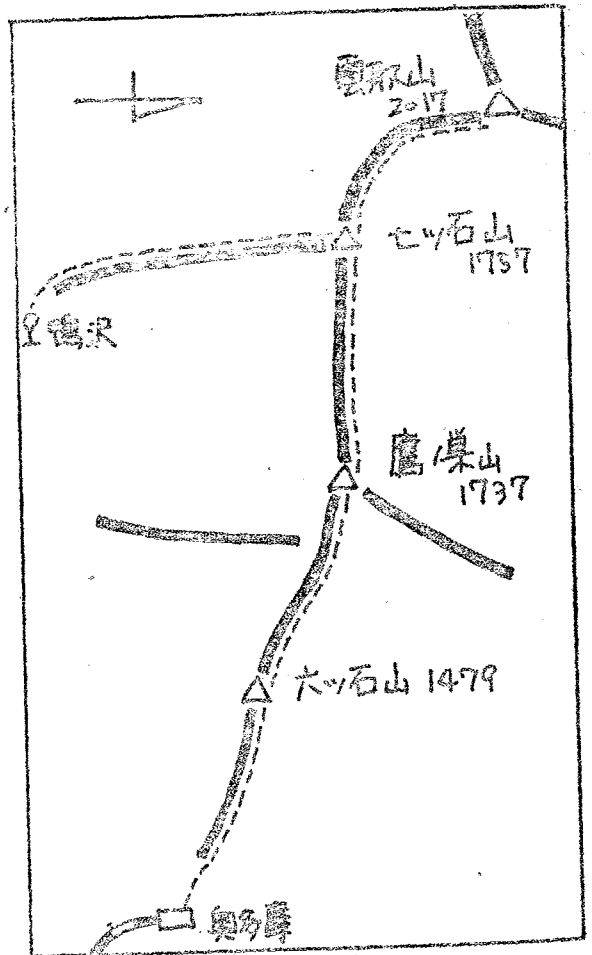
雲取山山頂避難小屋の軒
下には2組の別なパーティーが
いた。我々はそこで EPI に火を
つけコーサーを作って、そいつを
おぼりながら晴れた日には360度
の大展望がながるが、今は白
もやにまぼろしと包まれている山
頂に立って、自分を裏切った自
然を恨みながら、無意味な微
笑を交わし合っていた。雨の為、
寒さをおぼえた我々は山頂を
後にして、セツ石小屋のテントへ帰
っていった。そう、山頂を後にして。
しかし、山頂と思っていたその場所
は実は山頂ではなかった。その
事実を 1985年5月5日に著者
によって判明し、本当の山頂は
我々がそう思った所から北北西
25mの所にあった。
テントに帰った我々はランチを食

べて元気を出し、沈みかちな心を無理にふるい立たせて、石尾根縦走に出発した。鷹ノ巣山避難小屋までのだらだらした道を70分で歩き、かたむき坂を登って鷹ノ巣山山頂に着く。山頂からの展望はゼロ。雨は小降りになったものの、あたり一面すべてが濡れている。こんなとこに長くいても仕方ないので、早々に出発。立ち止まると寒さが襲い、しかも濡れて何も見えないので、ひたすら歩くしかない。中村と内倉はひたすら歌を歌い、中川と新倉は黙々と歩く。六ツ石分岐でレストを取る。だらだらした道が急になってきて、歌っていた連中も疲れて歌をやめ、ひたすら走り下っていた。するといまなり展望がひらけた。雲の下に出たのだった。いまさら展望がまいても見えるのはくだらない。尾根ばかり、ブツブツ文句を言いながら雨上りの、あの奥多摩や丹波特有のめちやくちやく滑べる赤土を踏みしめながら走り下った。

眼下には奥多摩の町が広がる。最後の特別小快速がホームからでいくのがまるでNゲージの

様に見える。途中にあった神社で着替えを済ました我々4人は再び雲取山へ登り、頂上からの展望を楽しもうと約束し、奥多摩の駅へ向って坂を下りていった。

誰もが楽しい山行になると思ったこの個人は雨が降って展望、ゼロという悲惨なものになり、気分は沈み、新倉は雨男の株を上げたのだった。



○面朋登高会 会員 (~37期) 及 現役 (38~40) 名簿
 [特別会員]

都築 修一 390 松本市
 中村 淳 155 世田谷区代沢 2-25-20 (411) 1974
 岩井 富津雄 167 杉並区善福寺 4-8-9 (1394) 5714
 大西 千恵子 176 練馬区桜台 3-12
 篠崎 武 190-01 西多摩郡日の出町
 大久野 1718 0425(97) 0706
 石井 学 167 杉並区善福寺 3-10-19 (390) 2937
 増田 良繁 185 国分寺市光町 2-20-31 0425(77) 2430

[普通会員]

安藤 英彌 (1) 190-02 多摩市桜ヶ丘 1-42-3
 林 春彦 (2) 133 江戸川区北小岩 5-28-3 (672) 0963
 南波 貞敏 (2) 185 国分寺市南町 2-23-26 0423(21) 2361 (473-95-4316) 同才会月会
 長崎 正躬 (4) 155 世田谷区代沢 2-6-11 (419) 1969
 田中 将利 (4) 165 中野区大和町 3-32-1 (336) 2151
 田中 実 (4) 166 杉並区阿佐谷南 1-3-18 (311) 6389
 平沢 勇 (4) 070 旭川市忠和4条 1-66 0166(61) 4083
 笹田 英次 (4) 164 中野区中央 3-15-1 (363) 7847
 山口 雄弘 (4) 180 武蔵野市吉祥寺
 本町 2-14-17 0422(22) 5887
 佐藤 信治 (4) 192 八王子市本郷町 8-7 0426(23) 5347
 松田 朝夫 (4) 565 豊中市新千里西町 2-8-4 06(832) 5280
 町田 明 (4) 167 杉並区下井草 4-20-20 (390) 3217
 里見 朝親 (4) 167 杉並区本天沼 3-16-1 (396) 5066
 渡辺 享 (4) 187 小早市鈴木町 1-258-2 0423(42) 3517
 目沢 民雄 (4) 386-22 長野県小県郡真田町菅平 02687(4) 2018
 成瀬 泰雄 (5) 113 文京区西片 2-8-7 (812) 1089
 加藤 鈴夫 (5) 191 日野市平山 3-29-2 0425(91) 2149
 鈴木 潤 (5) 168 <在ブラジ> 杉並区浜田山 3-20-2 (312) 2791

林 武志 (6)180	武蔵野市吉祥寺東町 1-11-17	0422(22)4338
川口 和雄 (6)215	川崎市多摩区百合ヶ丘 1-9-17	044(966)0162
米野 弘躬 (6)189	東村山市秋津町 4-42-58	0423(94)7456
岩波 康之 (6)124	葛飾区奥戸 2-2-13	(696)3721
飯塚 康史 (6)30901	茨城県北相馬郡 藤代町宮和田 971-26	02978(3)0988
小田 尚於 (6)30075	茨城県北相馬郡 藤代町宮和田 971-7	02978(3)6761
岩崎 元子 (6)227	横浜市緑区奈良町 公団住宅奈良北団地 4-807	045(962)7763
桑田 敏子 (6)310	水戸市見川 5-127-124	0292(52)6418
稲田 弘美 (6)351	朝霞市幸町 2-17-2	0484(62)2605
松田 稔 (9)182	調布市柴崎 2-13-3 <small>7704 丘 1-4 B-606</small>	0424(86)5787
黒沢 隆 (10)251	藤沢市片瀬山 2-8-18	0466(26)3183
橋本 鋼太郎 (11)156	世田谷区野毛 1-21-13-102	(702)4321
田中 泰弘 (11)	<左アブア>	
沢野 徹 (11)214	川崎市多摩区泉谷 2-15-7	044(954)7113
関谷 興雄 (11)180	<在中国> 武蔵野市境南町 H2-15	0422(31)7774
梶内 俊夫 (12)213	川崎市高津区二子 424-1 高津宿舎 104	044(833)5969
川田 秀明 (12)114	北区豊島 5-4-1-1036	(919)8206
小川 建吾 (12)188	田無市緑町 3-3-16 BB-3	0424(65)6260
橋本 章 (12)		
野原 光 (13)468	名古屋市天白区表山 2-2301 トビラ表山ハイツ 2-302	052(832)6822
板垣 乙生 (14)980	仙台市国見 3-3-16	0222(33)8706
山本 省治 (14)		
小津 亮介 (14)257	桑野市南矢名 293-4	0463(77)5761
平木 桂太 (15)767	杉並区南横瀬 4-12-16	(332)2897

上遠野 清 (17)243	川崎市宮前區宮崎 6-6-55	044(854)0703
梅原 伸二 (17)303	志木市館 1-6-6-203	0484(74)3521
宮武 義昭 (18)		
尾崎 純理 (18)165	中野區弥生町 5-18-15-301	(265) 6071
滝口 道生 (18)37071	群馬県佐渡郡玉村町 上新田 1446 番六田地 93号	0270(65)6044
三浦 潤 (18)460	名古屋市中區平和 2-2-8 三井東別院 八ツ403号	052(332)3788
小野 裕 (19)	調布市市国領 7-15-12	0424(85)5704
岡田 徹 (19)154 在175	世田谷區弦巻町 1-1-11 第一勸銀弦巻分社 4-505	(424) 5935
近藤 彰子 (19)180	武蔵野市吉祥寺本町 4-24-9	0422(22)4713
佐久間 令子 (19)177	練馬區三原台 3-5-16	
山本 泉 (20)167	杉並區本天沼 2-38-17	(394) 2629 ⁴⁴ 394-262
永井 祥一 (20)202	保谷市ひばりヶ丘北 1-6-70	0424(21)4305
古城 春実 (20)244	<在74力>横濱市戸塚區 平産 2-11-24 古城盤方	045(821)8400
伊東 伸作 (21)276	千葉県八千代市勝田台 3-23-22	0474(83)5718
0472-26-8886 會社 (21)01-6325	杉並區阿佐ヶ谷北 5-9-13	(337) 2635
渡辺 喜仁 (21)166	杉並區成田西 3-10-26	(311) 8647 ⁴³⁹⁻⁵²
中村 正俊 (21)166		(321) 8401
秋山 抄子 (21)		
滝口 優子 (21)180	武蔵野市中町 3-5-24 ³⁷¹ 277/201	0422(54)7487
佐々木 抄子 (22)		
伊東 佳子 (22)276	千葉県八千代市勝田台 3-32-22	0474(83)5718
吉田 真也 (23)360	熊谷市新堀新田 日立金屬 6-106	0485(32)6207
西井 和彦 (23)167	杉並區善福寺 2-1-2	(399) 4129
中村 容子 (24)168	杉並區久我山 3-10-36 渡辺方	(334) 3824

下

久米 祐一郎 (25) 213
 中尾 伸二 (26) 174
 遠藤 彰 (26) 641
 角田 肇 (26)
 遠藤 信行 (27) 193
 伊東 顕 (27) 359
 松本 哲郎 (28) 230
 世利 孝也 (28) 663
 青谷 知己 (28) 176
 宇佐 雅己 (28) 206
 中野 敏彦 (29) 165
 高井 弘三 (29) 176
 菊谷 隆子 (29) 176
 岡田 隆 (30) 177
 池田 達男 (30) 168
 福原 耕太郎 (30)
 木村 亨史 (30) 202
 井汲 重弘 (31) 176
 河合 秀樹 (31) 177
 藤岡 毅 (31) 260
 穴戸 泰成 (31) 177
 宮崎 孝一 (31) 177
 有藤 達志 (31) 746
 田宮 建三 (31) 359

川崎市高津区諏訪 325
 板橋区志村 2-14-18-202
 和歌山市白浜 1130
 花王星和寮 3-257
 八王子市外町台 3-36-1
 所沢市北野 718-55
 横浜市鶴見区諏訪坂
 20-3 北寺尾寮
 西宮市甲子園浦風町
 8-17 梅興寮
 練馬区練馬 2-31-7
 多摩市杉山 5-6-1
 福岡県北九州市門司区
 田野浦 1-11-14
 練馬区光丘 3-3-1 1103
 練馬区桜台 6-19-9
 練馬区西大泉 1-14-2
 杉並区和泉 1-6-9
 保谷市本町 6-15-8
 練馬区豊玉中 3-17
 練馬区南大泉 4-31-10
 千葉県穴川 2-3-4 伊藤方
 練馬区大泉学園町 5-31-16
 練馬区大泉学園町 2
 大田区久原 4-29-19
 所沢市並木 3-1-6-1010

044 (822) 9966
 (967) 3560
 0734 (44) 4161
 0426 (64) 9352
 0429 (48) 8658
 045 (581) 3761
 0738 (47) 1232
 (992) 6393
 0423 (72) 2977
 093 (322) 2935
 (996) 5885
 (992) 5880
 (922) 3856
 (321) 6304
 0424 (64) 3655
 (971) 4990
 (925) 5425
 0472 (56) 5728
 (921) 2785
 (922) 1384
 (755) 0247
 0429 (95) 3158

松本 建司 (33) 177	練馬区南大泉町1-4-79	(922) 8796
東山 晃 (33) 177	練馬区春日町4-22-70	(990) 1572
江沢 孝 (34) 281	千葉市小中台3-1-18 ^{大野} ₇₂₄	0872(55) 9888
荻田 哲也 (34) 168	杉並区下高井戸3-3-4	(302) 3500 B4
浜田 和康 (34) 166	杉並区和田3-28-18	(381) 3353
○吉田 浩之 (34) 177	練馬区南大泉 3-7-6	(922) 1750
○山田 裕久 (34) 165	中野区大和町1-22-73	(337) 7413 併29
加藤 彰彦 (35) 177	練馬区石神井台5-12-15	(920) 1864?
○西八 利雄 (35) 177	練馬区南大泉 1-30-10	(921) 3561 NHK 2F
森川 直人 (35)		(322) 8897
武内 正和 (36) 176	練馬区早宮 2-22-29	(933) 6386
相澤 善正 (37) 165	中野区新井 2-18-11	(386) 2287
辨野 裕 (37) 176	練馬区中村南 1-31-13	(926) 7546
○上野 年良 (37) 165	中野区白鷺 1-31-7	(336) 3769 B4
沖田 秀子 (37) 167	杉並区西荻南 2-29-70	(334) 6678
額賀 淑郎 (37) 168	杉並区宮前 3-3-24	(333) 9690 uic 入?
三木 真洋 (37)		0893(35) 0860
○百藤 大助 (38) 168	杉並区浜田山 3-35-1-902	(315) 9207 併3
○鈴木 学 (38) 177	練馬区上石神井南町5-3	(929) 3437 併3
本間 文裕 (38) 168	杉並区方南 1-33-24	(328) 3426 不明?
笠原 紀子 (38) 167	杉並区本天沼 3-23-10	(390) 6079
松原 美野 (38) 167	杉並区西荻北 5-23-1	(399) 7621
○内倉 昌治 (39) 164	中野区中野 3-17-7	(382) 4815 早大
中川 雅夫 (39) 196	昭島市美振町 5-20-5-504	(0425) 45-4711 幸那
○新倉 秀也 (39) 166	杉並区阿佐台北 4-28-14-706	(339) 0787 中央
○中村 兼一 (39) 164	中野区東中野 3-16-18-303	(368) 9623 加
坂本 尚志 (40) 167	杉並区上荻 4-14-28 杉並寮A-204	(394) 4134 浪人
高橋 寛和 (40) 167	杉並区荻窪 5-1-16	(391) 1391
浜本 光紹 (40) 167	杉並区南荻窪 1-34-17	(332) 4127

42

— 編集後記 —

- ・今号は、「記録を残す」⇒「とにかく出版する」ということを主眼に置いたため、・編集が手抜きである・味気がない・オリジナリティーがない、等いろいろな問題があるが勘弁していただきたい。
- ・手元、印刷・製本も全て我々の手でやったわけだが、その分費用がかからず、個人負担も少なくなったと思う。
- ・上に書いたような事も参考にして今後ともまめに出版してもらいたい、ただ、原稿集めと清書集めには余裕をとっておくことを忘れないように！

訂正

- ・27頁右側の8行目以下
「この際、計画下山口である白石側と畑薙側のうち、畑薙側は自力下山が可能であると判断し、白石側に万一に備え、救援隊を派遣した。」に訂正

彷徨 23

1985年9月28日発行(80部)

編集：鈴木 学 (38期)

印刷所：杉並区高村戸地域民生センター

発行：都立西高ワンターフォーゲル部

〒168 杉並区宮前 4-21-32 都立西高内